



門
號 4500
卷 1

庸園大人著

善卷書譜所圖會

静觀堂梓

早稲田大學 圖書館
2011.12
書



信濃國
善卷寺
寸
時

形々又々如如字々為々
為所々也々字本々如如
大々下々木々山々如如
之々以々之々淺々之々其
烟烟々字々如如々今々如
之々之々如如々之々如如

之々之々之々以興々田利忠如
浩馬の驛跡々之々如如
之々之々之々如如々如如
之々之々也々有明山々如如
之々之々如如々之々如如
葉々如如々之々如如々

物にふりかへてはるるに
ふたつはるるにふたつはるるに
何れも物語す
あつたはるるにふたつはるるに
あつたはるるにふたつはるるに
あつたはるるにふたつはるるに
あつたはるるにふたつはるるに

あつたはるるにふたつはるるに
あつたはるるにふたつはるるに
あつたはるるにふたつはるるに
あつたはるるにふたつはるるに
あつたはるるにふたつはるるに
あつたはるるにふたつはるるに
あつたはるるにふたつはるるに

統其業今茲甲辰春後刻
刷之地可也特至山房為書
此後復年曰影歸先王
之一子以冠焉余後之
年二書特不之逆標每
子以公于世於是也
年有國之者流者什

ハカ也近日堪田之屬園
通有年久矣晴涼畢出
卷微之有於年交之
善先者道名所圖會也
換學曰本如名所畫之
可也亦以年為國會其
噴不謂知田之輝至日之

圖畫而不上因記之以爲
序者若以編之行于世則
向來爲之送緣罪者之故
起諸善者見之願遂結
生淨土之目亦不廣大
仲禮乎年爲月之角圖
也善者知後

天保十五ノ年甲辰ノ夏
月ノ上浣ノ日於石居

尾張精一居士深田精一



自序

古人謂へめちと有て書い言と畫さけ言とを意ををを
あやそ〜意ををを〜と歎すれや潮をの〜は
ものら畫圖なり夫画圖ら其形體改模寫〜其の
態情をを畜し天象地勢より象堂室林泉の
い〜あ〜疎密をその真看小随ひ青黄は是と
筆意み收めり坐覽に便きは所以なり是ををて
迷廬八萬れ高きを繁然や〜を眸強咫尺
洵み巡る〜華藏二十れ重なるをを廖雨や
して情を方寸乃地り寓をはは神足を藉ら
ち〜忽に千里宏外み遊ひ天眼を具〜すれも通

此の境界を見れば事残得やのふやうに嗚呼國畫
乃物當るもあつた大なるまや古來邦國に靈區州郡
を勝地大抵圖抄有るも既に世人の看弄を爲す
所あり爰に洛乃社里籬寫の文化を頃編集
する木曾路名所國會を陶文あり京師より
江戸に到る其間四十九驛と祖述し傍香取麻嶋
日光山筑波根を章明め其真系を描し其夏
實を揚ぎ人我教く隠几の睡を覺さしむるの共
洗馬の岐途より善光寺と過歴し追分驛に到
る地頭宏如かゝり茂馬として全く載るに偶川中
嶋の日記姥捨山乃古歌等と誌をもつて母畫畫を附

を以て予嘗て以為字小非され之義を曉さしむるに
國ふおつたまの情を觀るにうらやま今勝地有る書
物に書有るに國なれと誰か惜まざるべからずや豈に
これ予に遺棄を患て寡婦の利を不盡那りと遂
小此舉に志し籬寫の曠に倣むとあるを獨蒙昧と如何
にもんや或人曰患ることなくも遠く崑岡に玉を拾ひ靈
山の寶を求ふも非され之只見る俟に摸し聞かむ
志るに可なりと於其某年早津乃温泉に遊
ぬり因り始めて管城を執り略創州を志るに母
日程限るあるを不果しを飯子明年より節度
使より洗馬の岐途より征るに武笠に戰場あり

東より國分寺に古塔海野田中小室と徑悉く歛
 ておもと詳も毫を遼分驛小止る先述は讓りて敢て贅
 せざるゆり然して数地の中古今沿革もゆる證あふみ
 實録正史を以ては其の共學陋識早して其定ふ所或ら
 確乎とる小遠く其圖畫小於るも實に自ら筆し
 真小遠さを要する人より責を工拙を為し固に逃る
 所なく清諸君子寛優に看過を以幸甚うんや云爾

天保十四卯少々仲秋日

濃陽今尾藩 庸園利忠



凡例

- 一 此書は信濃一國の内を走出馬驛は分街より桔梗原と松本へくま
 善光寺へ詣りて遼分驛小止る其間の名所古跡神社佛閣を載せ
 驛を以て一圏と冠りて行程をも必記に
- 一 中山道は木曾路名所國會に讓りて小省きぬ只善光寺道の畫會と
 のを知るべし大抵左右三里が程の名たる處を著せしむるも殊に著記
 大社等にありては三里を越ゆるも是を出入穂高及び戸隠に類是なり
 方位を示せしむる先例小循ひく其れ東何里某の北何町ありや
 記し又神社佛閣は左右とその神躰本尊の左右なり又道路の
 左の右乃方とい西より東に赴く旅客は左右なり
- 一 此街道は中山道乃脇道なれば先哲の紀行及び古歌なども稀に
 きたる善光寺詣り信者は行の邊鄙なりは是とも遼分驛

よる善光寺中山八宿通と北陸道に往還たれば諸侯も往來
 ありまふり
 一 中山道妻籠の橋場より右折せしむる元善光寺へ系を垣尻へ出る
 道の程を後編にゆづりてく爰小畧
 一 松本より岡田宿へ移を善光寺へ此順道とせしむる爰深川より
 養老阪へ轉せしむる安曇郡乃内なる名なる所づくを以て勝情
 み備ふる故なり
 一 安曇郡の内、脇道なきとて此序に名高く岡へ所を奉
 心ありき人の道標ふもや古老の野譚をも拾ひて是を附を脱
 漏ありて後人の補遺を俟而已

善光寺道名所圖會卷之二

目錄

○元洗馬	光輪寺藥師	○洗馬	志村林泉 百瀬林泉	太田清水	肘松
○郷原	桔梗原	○原新田	神明宮	○村井	
富士見橋	平田村	出川町	春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	○松本	光明院地藏 拜殿 五奈天神
筑魔八幡宮	本社 稲屋 八王子 鳥居類	春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	初市立	正月十日
鬼塚 弓矢塚	天照太神社 神樂殿 祭十権現 藤森祠	春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	佐々木塔	鐘樓 靈室
稲荷祠 三ツ峯	本社 市神の社	春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	玄智井	北林山極樂寺
宮村大明神	拜殿 葦塚	春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	經堂	免田
大寶山正行寺	本堂	春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	太子堂	金峯山牛伏寺
木曾山長稱寺	本堂	春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	什室	
松本産物	四堂樓	春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	林藤田跡	
金峯山保福寺	重玉松 樓門	春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	稻荷社 什物	
觀音堂 叙迦堂	鎮守社	春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	稻荷社 什物	
御供所 經藏	牛堂	春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	鐘堂 骨堂	
		春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	鐺石	
		春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	蓮池	
		春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘	牛額	
		春日 廻廊 古面 梵鐘 神輿庫 末社二十前	牛頭天王 窟龜殿 神宮寺跡 鐘の銘		

飛絲曳風

干歲甲辰夏月書於

繪等矣幽下



信州佛域山

幾驛披卷坐知

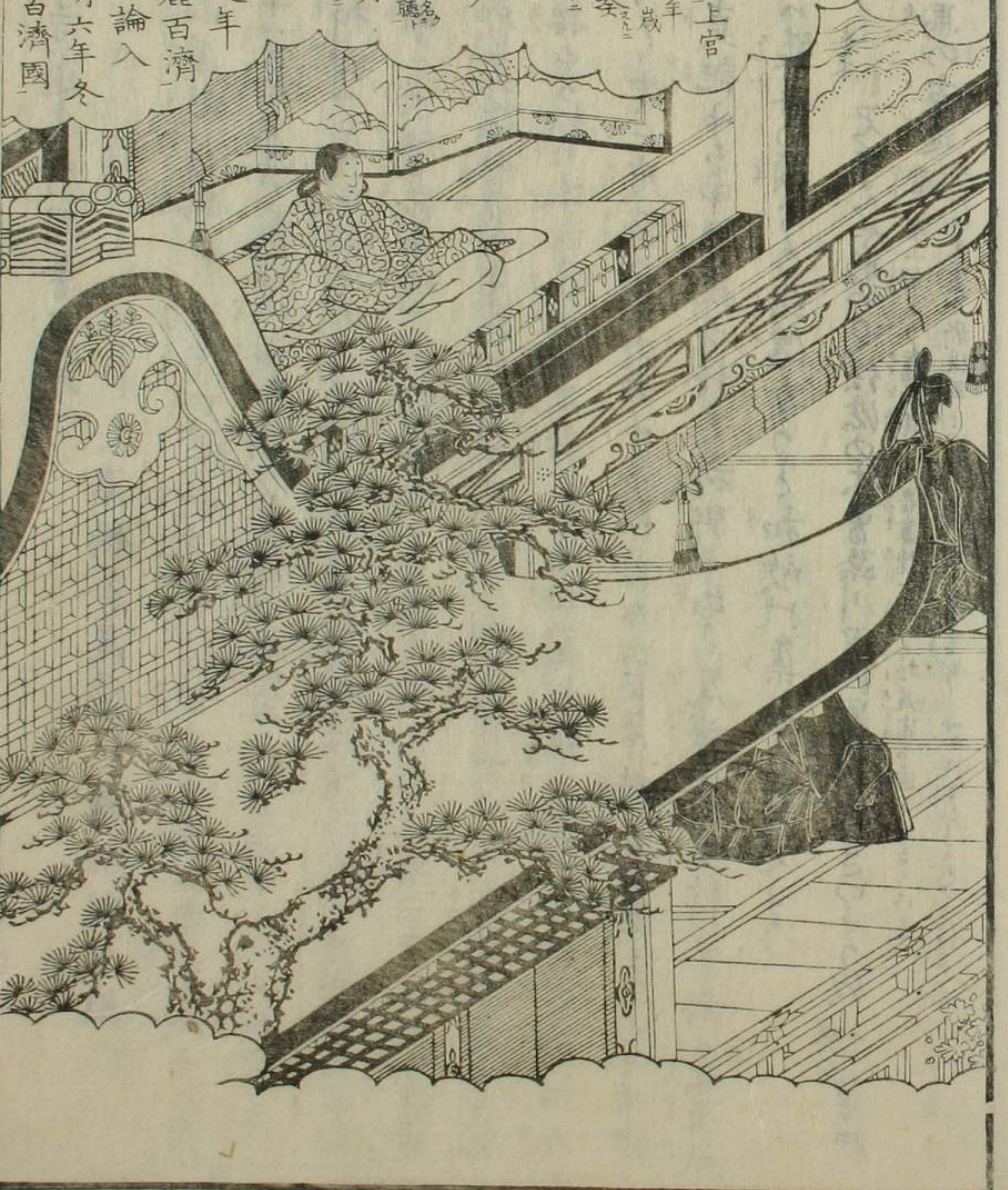
霸蹤勝蹟

南亭雷畫

聖德太子者攝豐日之子豐日欽明帝之子
即帝位用明母曰允穗部間人皇女夢
天皇是也
比女來曰託妃胎躍入口中覺後
猶吞物遂任及六月胎中而
言聲聞于外
敬達二月
羊之春正月
朔日妃遊
至厥於是
誕生在胎
驚抱上殿
四月而乃言
能知入翠
止其軀體
甚香名
曰厥方
王子
敏達
帝崩
豐日
即位統



用明天
 皇父
 帝愛
 敬居
 官南上
 殿故名上宮
 皇子時年十三歲
 允八人奏
 事一時
 能聽故
 名八耳
 皇子或名豐聰
 又睿明
 仁恕故
 名聖德
 皇子近年
 自高麗百濟
 僧及經論入
 貢用明六年冬
 十月從百濟國



善光寺道名所圖會卷之一

濃陽 今尾藩 豐田利忠編

東山道岐菴路 人皇四十二代文武帝の馭寓大寶二年戊戌十二月

十一日始吉蘇乃山道を瀾るるに續日本紀小見之又四十三代元明帝乃

和銅六年甲寅七月美濃信濃二國に界徑道險阻小往還艱難なるに

固く木襲路を開くと同帝の紀小出たり又其後元慶三年九月四日辛

卯美濃信濃の國縣阪上れ岑と以て國の界とせしむと三代實録小見ぬ

按るに日本書紀小日本武尊東征の時碓日嶺やく阿豆麻波夜

くや三度歎き努たむと云へるる六百年許前の事なり又古

史記ゆ甲斐國を經て科野より出く尾張小針を經て那本為路

に延喜の頃より信濃なりと和歌集みと見えたり

夫木 又せそや那つ信濃の本曾路川君に思ひの深きつらう哉 従三位 行家卿

洗馬の古道 昔の本山驛より舊洗馬に出吾妻橋と稱す塩尻宿を通りさうらと云は 今洗馬宿と新洗馬といふ二驛代々交易せり也

新著同集

信州筑摩郡洗馬に光輪寺の薬師を今井四郎兼平涼く信仰して毎日

糸指せしむる風雨を凌ぐ中て居住あり道一里に間廊下と造りは

きつとと名礎の跡今ありと也 是旧洗馬なり光輪寺也 薬師今も存一帯

郷原(壹里半) 善光寺 塩尻(壹里二十町) 中山道 京師より東都迄十九

驛の内二十九驛小當り凡六丁程相對して蒼と方諸侯交代の荷

物同方と改むる役所を置たり東海道府中れ如し

抑此驛に吉祖の深山幽谷と分凌ぎ桔梗が原の曠野小出れ始りよんて本

曾の咽喉なりと謂ふ繁昌の宿驛あり遊女等多し本陣の百瀬氏志村氏

に林泉々中山道小稀なりとや假山泉水の幽趣奇石珍本乃布置得ん方

形く往還の旅客を多く此所小休泊して詩歌を遺せり

洗馬の記方の志村氏が山田と伝ると云

古後と塩尻と云ふ

善光寺なる人の心を洗はせしむるに終り光を照らすを

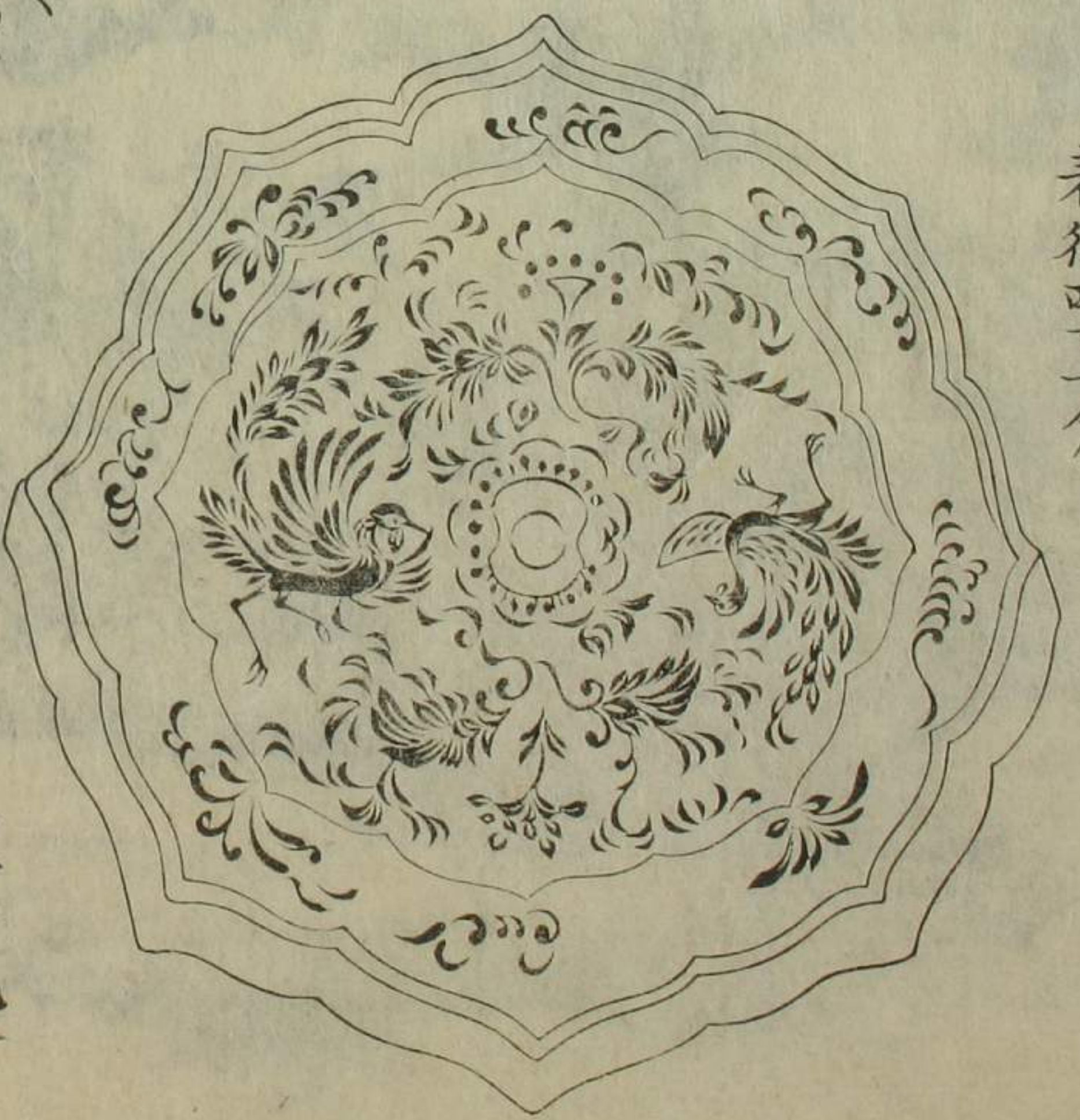
しるに年以塩尻と云ふ後と云 志村氏の又云ふと云ふ

清國正三位 長觀卿



寛政庚申の歳志村氏
 新ふる田圃と壑内へ
 せし中より壺二口鏡二面
 刀一振鏃六枚古器物
 教品と掘出し終小其
 家の珍器とせしより
 諸名家寄贈乃
 詩教文章等も
 又少加し秘をなよ
 花し世は博くも
 中し古鏡のこを
 模写し好古の士乃
 雅觀小供を於奉りき
 夏々天童翁の
 文章小はく
 とう

表径四寸一分



裏径三寸九分

わかしをいれりてるるは後々のわし代の恵たうまや
 此近きわかしをいれりてるるは後々のわし代の恵たうまや

あつめははらにりて大津代の光を待 後るるは

東都 斐雄

山本安房守 季鷹

信濃國筑摩郡桔梗原西南巖嶺峽口有驛亭曰洗馬 馭西有
 巴流曰澁増川驛之東有尾溪山區也山上有墟名延溪墟傍
 有一區名倉溪二溪之左右載芟墾闢得甫田曰新甸墾者穿
 一邱數尋獲壺一鏡一刀一鏃六大容庾鏡面猶可鑑背文鏤
 雙鸞銅鍊古色可愛其刀長五尺而短鋼刃爛蓄僅存舊狀
 琿形非常制古之儀刀也善相刀者曰八百年前之物鏃二種
 魚尾樣柳葉樣各三刺試溯八百年 朱雀帝天慶二年己亥
 東北戰多乱國是平將門叛之歲也筑摩郡有大飼氏者 醍
 醐帝皇胤數世孫土佐守直氏築城於諸路經畧方境洗馬
 馭東南數里許有古城凹里老口碑云往昔有大飼四郎者居
 焉然則大飼族所據之古城耶所獲之古器即大飼氏之所遺
 耶共未可知也予所善志村氏累世家于洗馬名族也曩祖為
 大飼氏部族云今出古器地即其久世所有也悠歷奕奕雄族

相羨以至於今予適遊其地值獲古器予録所聞具地志之撰
考獲器之邱古塚已其側有喚堂坂之蹊蓋八百年前犬飼其
陣没之日部族臣子等火化為仏舍利造壺為斂器親隨戒器
戰國名士之俗皆然因營塔堂安永魂者耶予誓其蹟爵貴祿
厚者之遺址果夫犬飼氏者耶倣徹田在安永九年庚子作又
加墾而獲古器在寛政十二年庚申志村氏名履徳與廻翁諮崇
敬古器建碣祠堂清城勒其梗槩一在慰安千古之威靈也
蘇門山上古邱墳 千載那時舊將軍
劔氣躍泉曾不朽 因縁自可附徐君
右 松本藩 天童誌
蘇峽志邨氏穿地得劔真千載以上之物所得之地
志村氏之邑在洗馬驛東

甲陽軍鑑

天文廿三年寅八月廿六日信玄公本曾以馬を出ささし得瀬馬某
とい侍降参りし九月末小甲府へ召連らるる次のや典厩廿利
左侍門尉兩侍大將の作付らるる甲府一蓮寺とす以時宗寺とす

湫場を内成敷なり此湫場小身なりといども大別の者其く信
州弓矢強き事大方なり守陣者中間まで武勇となりて外藩の
者さあさあして雑兵といふに二百十人湫場敷と一度に切死せ
る典厩其利尻小を手負死人あり

神明宮

義仲馬洗水

神明宮 宿をてるとく右にれ湫小あり當所
の産土神なり天照大神を崇祀る
義仲馬洗水 右田の洗水といふ洗う所をさう左の方にあり右田村の内なり本若義仲
小あづま橋をまへに馬を洗ふといふよりいふに名あり是より十八丁西小に洗水あり本若川
せり古名といふ 本若川 是れ中山及の本若川といふ水原も多し時洗
川之流あひく大らとかり本若の西小 勝して本山宿の裏通よりいふ小出小流一ヶ所なり谷
つらゝ總念の格もより犀川といふ

肘杓

肘杓 洗馬をさうく埴尻れ方へ別る坂にありをさ八天をうり繁
茂しては方れ枝と意に旅人の笠を掲げるとも官府よりつり流
流して枝葉と折るる代制なり其意百坪を除地なりといふ

是より梧梗が京めく東の埴尻も西の本若川端北に松本れわらりまへく平原
曠野なり一ヶ太平の所代と成り鼓腹の農民も一松耕に力と盡しつ

神明宮
太田の清水



春江補畫

も不毛の地^{もふも}にして郷原^{ごうげん}までの間人家^{にんげん}多く又立曉^{たてあけ}なき本庄^{ほんじょう}より旅人^{りょじん}暑氣^{しよき}の如^{ごと}く湯^ゆを清^{きよ}くけ用^{もち}きよむ一此街道^{このかいどう}五六月の頃奥州南部^{おくしゅうなんぶ}をよろ牛^{うし}れ子を多く牽^ひ出^だるなり程^{ほど}多くは系宿^{けいしゆく}ふつとぬ

筑前 郷原

村井^{むらい}迄一里半南北八丁^{はちぢょう}程お對^{たい}しと巷^{ちやう}とたき民家^{たみけ}多し宿^{しゆく}の入口^{いりぐち}小唐^{こたう}松の大樹^{おほいつゆ}二株あり巽^{すみ}の方^{かた}を町^{まち}びらり列樹^{れつじゆ}の松^{まつ}茂^{さか}り朱^{しゆ}乃^の鳥^{とり}居^いるく福^{ふく}荷^にの祠^{ほら}あり郷原^{ごうげん}乃^の産^{うぶ}土^{つち}神^{かみ}とい

郷福寺

桔梗山^{ききやま}白馬^{はくば}段^{だん}と号^{ごう}し直^{ちよく}言^{ごん} 本堂^{ほんだう}本尊^{ほんそん}大日^{おほひ} 觀音^{くわんおん}堂^{だう} 正觀^{せいくわん}世^{せい}吉^{きち} 聖^{せい}徳^{とく}太子^{たいし}作^{しやく} 信州^{しんしゅう}百^{ひやく}番^{ばん}の内^の二十八^{にじゅうはち}番^{ばん}の

薬師堂

聖天堂^{せいてんだう}山門^{さんもん}惣門^{そうもん}本焼^{ほんやう}失^しして仮殿^{かりでん}形^{かたち}なり句碑^{くひ}有^あ


野^のを様^{さま}り馬^{うま}拽^ひむきよ石^{いし}や^やき^き とき

原新田^{はらしんけん}村^{むら}乃^の入口^{いりぐち}ふ分^{ぶん}き道^{みち}あり石標^{いしひょう}に 右^{みぎ}系^{けい}のせろ 松^{まつ}本^{ほん}の方^{かた}より來^きる人^{ひと}乃^の左右^{さゆう}なり元^{もと}上方^{かみかた}筋^{すぢ}より善光^{ぜんくわう}寺^{てら}へ系^{けい}白^{しろ}ひ多く中山^{ちやんざん}道^{みち}妻^{つま}籠^{かご}宿^{しゆく}の橋^{はし}場^ばより右^{みぎ}へ入^いり飯^{いひ}田^{でん}の城^{しろ}下^{した}へかり甲^か洲^{しゅう}の元^{もと}善光^{ぜんくわう}寺^{てら}へ系^{けい}りまより塩^{しほ}尻^{しり}宿^{しゆく}へ出^でて此^{こゝ}道^{みち}へ來^きるなり 塩^{しほ}尻^{しり}より 是^{こゝ}側^{かた}に神明^{しんめい}宮^{みや}の森^{もり}あり祠^{ほら}の右^{みぎ}脇^{わき}ふ立^た石^{いし}なり

兩太神宮へ四十八度 善光寺へ四十八度 秩父坂東山へ西國四圍信
別不殘寛保二壬戌天八月廿二日平林氏と鑄き

平林氏を俗稱善光寺坊といひ百姓中へ祈り糸指乃度敷と末せ小示
して子孫の後榮を祈りてたり

○桔梗が原 四方の山備へて平林の地之
今田南とててててて 此邊の河原めく矢の根石と拾ふり雨乃後

かど多しとぞ他所小もわととも桔梗が原のそ上品とみるなり其形 

猫數種あり色も水晶馬腦朽葉黒木あり都く本の類貝鉄
米根のおも土中に數百年を経る石とたる矢の根石と往古神軍討時の大の
根を乞ふと石壽軒雲雀が説あり

夏草や桔梗の原を露たのり

ゆきゆきは旗色もゆり雲れ峰

首塚をめぐりてゆりや枯野原

鷲十

凍帝

風如

桔梗が原記
時天文二十二年五月七日早天小小笠原方めと備をまて待越り

桔梗が原近きれ地以て持塚を堅固に守り一の柵ハ牛伏寺山の神乃森り

富士見橋流き次第征矢聖川より本曾川までの要害たり一の備り村

井の南西の方に在る熊の井一本杉れ方へ東道筋赤木村よりこせの本

原岩石に陣を取高日出村へかけく西乃方川を前二當取出丸と

築以長時本陣桔梗が原陣場二段に備り能場所なりある所所以

深瀬方先手の大将丸山筑前守備人を放しを長く馬を踊らせ討

く懸る合備ふ備田十郎玄清お別とる大将あは討とをなく弛出る中暮

三村肥後入道居城 今西洗馬 を堅固に守は遊まて甲陽勢と西の山を

廻り深瀬 右名 以後廻り裏切とる一男三村該河守五十騎少く床尾

山取出丸小甲州勢を待受導く三村織部 二男 放光寺後詰の城と

手勢百五十騎めく固免狼煙を揚ぎく相疊り甲州廻りの勢と一

緒小成り深瀬の城へ入る長時此有様を又叶ひくくや思ひん熊

井一本杉より信玄本陣へ使者とまて深瀬の城を武田へ渡り和冷

をとく信玄撲殺の信州の内々堪忍分りて少く宛行て中間以往武
 田に籠下りて居るの係り長時中さるの武田小笠原両家此祖の兄弟
 たり小笠原も舎分れ助同なれど代々將軍家の内師範より長
 時代よりて旗下に成るの末代まで乃耻辱たりとく兼引ぬ々
 直に伊奈郡の下条へ浪人たり下畧

村井

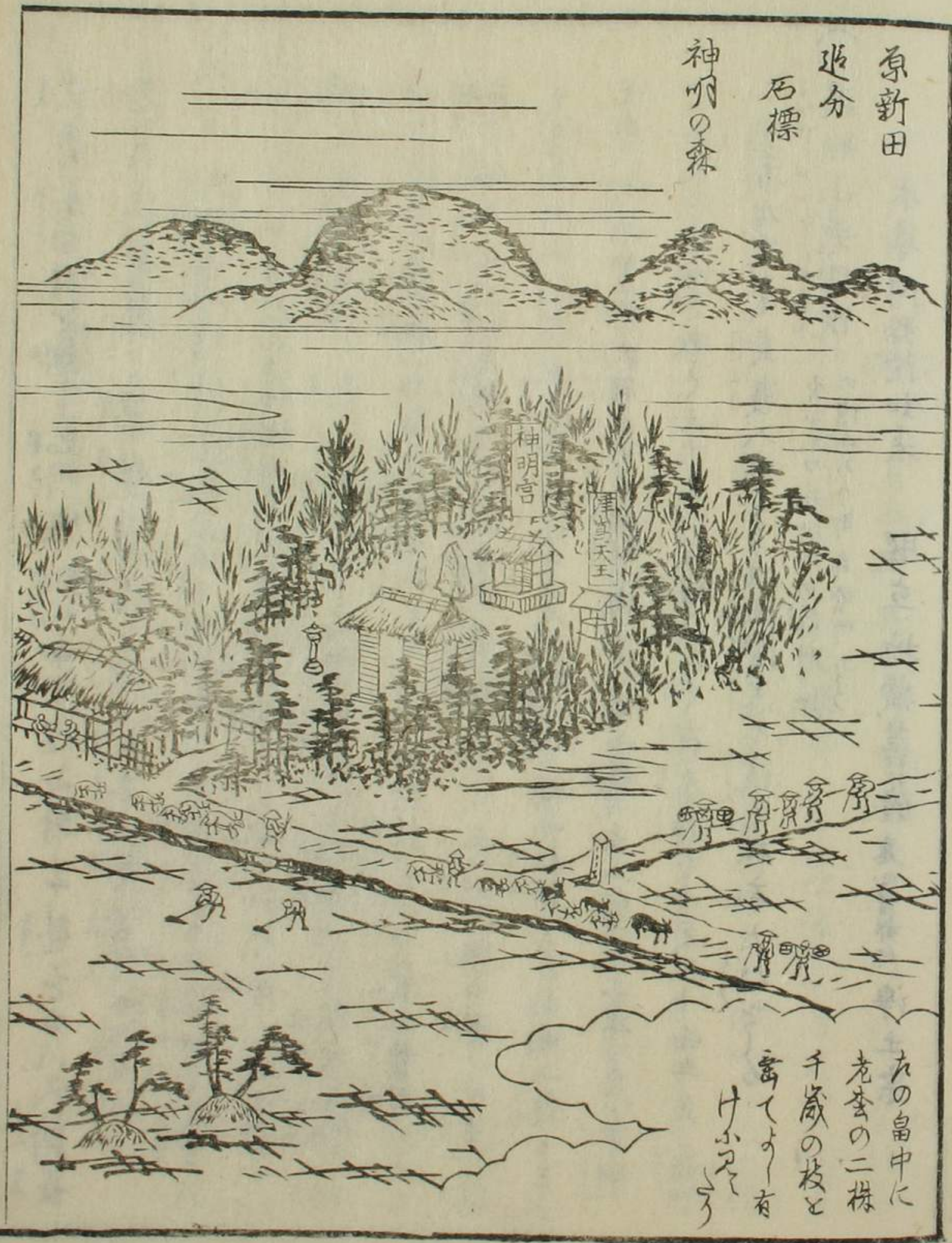
松本一里半南北六丁餘相對して巷とて民家多く町裏小散在
 する宿乃入口左側小神明の杜あり所此本居神とい

○椿太明神社

伊勢兩皇太神を勧請して例祭六月十六日なり 神主永持越中といふ
 椿太明神社 是より西三丁 祭神猿田彦命 天正十八庚寅年豊臣家の時六石乃
 地を属する例祭六月十五日なり村井とて富士見橋側小向碑あり

栗方〜〜〜富土を〜〜〜日やわ〜〜〜
 或が白ひ白羽の沖日記ゆて東海道のりた〜〜〜格の老ぬよつて好草の
 人あ文を〜〜〜友小あ〜〜〜けり〜〜〜不二山〜〜〜る〜〜〜けき〜〜〜

原新田
 進分
 石標
 神明の森



元の畠中に
 老木の二株
 千歳の枝と
 密くす有
 けふ〜〜

夫より平田村と越一出川町 四丁程お對して巷をあらはし又新長
屋といふ一村を越し築魔川の橋を渡り松本に馬喰町に入る

松本

園田を里浅間の温泉(十八丁)松本古名深志まゝに信濃と稱し
松平丹波守居城ゆく七萬石を領せらる城下は町廣く大通り三
街町數九四十八丁高家軒をたぐふ當國第一の都會に信府と稱し相
傳へ牛馬は荷物一日ふ十送附入るまゝ千送附送るまゝ實小繁昌れ地
抑當城を水正元鳴立右近を夫貞永といふ人井川乃城を移して是を築
それら大永三年水と宗淳といふ人一族たり同正仁科より此城を移るま
天文二年小笠原大膳を長時林の城より爰に移り同二十二年より甲州
武田家の持城と成り二十年に同珠代ゆく在番持なり天正十三年再び
小笠原右近を貞慶入城たり此城深志を改め松本と稱せり
○遍照山光明院 寺本入口長沢川の源神地
の傍より即馬喰町なり

本尊 阿彌陀如来 脇立 地藏菩薩 惠心僧都作 浄土宗

此寺ハ松本の驛長倉科何某のまご驛長たるより一頃の宅地
一が後一寺と形一けりたり此地藏井ハ石の座像あり丈四尺餘を
れ移り一人の力に堪り東都中目黒明顯山祐天寺岡山祐天大傍
正ら即ちの地茲に化身ゆく遷化の時不測の事どもあり一やたり然
るに後年祐天寺より頻小慈望して延錫なり奉り其形代として
祐海上人夢中の法姿を摸一當寺に安置せりとたり

東都中目黒祐天寺門前小建寺の鏡石の文意ハ
祐天大僧正ハ此地藏の化力なるを記せり

鏡石且 九四尺五寸
臺石角 前且三尺
横二尺
後二尺六寸
臺石惣高サ 四尺程
右土築めて石よく礎石組上り植木よく形容をかきり



○築魔八幡宮

つる川のありあり境内東西百間余南北六十間余大門通南
七十間中六間三尺往古八境内八丁四方あり

祭神 應神天皇 神功皇后 玉依姬命 以上三柱相殿
本社額 後陽成院宸翰 一鳥居額 弘法大師筆

天照大神 牛頭天王 春日大明神 三所相殿 本社の東に有 拜殿 本社の南にあり

神樂殿 并殿の南 鶴龜殿 瑞籬の外東 五条天神祠 同大門の西 側在り

鬼塚 同所 稻荷祠 同東側 弓矢塚 同南 三峯祠 八王子祠 二社共同 南に並

二鳥居 大門の中 龍屋 拜殿の南 西側在り 築魔權現 藤森 金毘羅 三所相殿大 門の西側在り

梵鐘 瑞垣の外 西側在り 鐘銘 丸の如し

正八幡宮安養常住 信州築魔郡國府

奉鑄此鐘 志趣者爲 天長地久 御願圓滿

國郡城邑 富貴安全 大小檀那 結縁昌依

現世安穩 後生善処 六趣四生 三途八難

凌苦惡生 皆令離苦 所至法界 平等利益

大檀那 源豊松丸 井 沙弥 永源

永正十一甲戌年十二月七日

願主住持法印舜海 大工 膳左衛門

例祭 六月十日 夜花火

つる川系ゆく真行 貴賤羣集せり 同十一日神事 作り舟 二艘

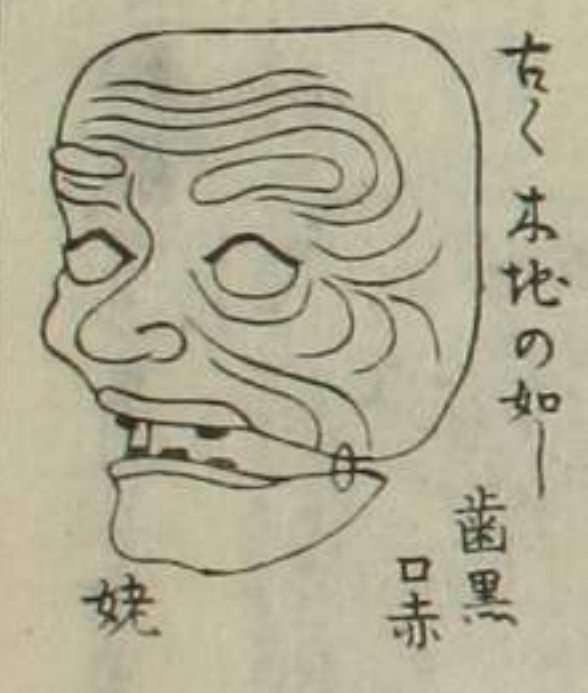
十一月八日 神樂湯立あり

六月の作り舟といふ舟の形をさぐるれ美服

めく粧ひ人夫三十人ゆく釣本社を三度走り廻るり速かり先舟の行

列を幟三十二本長柄十本次舟ハ幟三十二本長柄十本各杖突二人たり

先舟ハ飾り八幡太郎次舟ハ高砂の扇と焼かり其面と



古く本地のめ眉髭の神少レ

古く本地の如く 黒

黒持色本地の如く 眉

其外林掃部家に多くの古面を秘藏する其二を挙く



け面
ありけり
のせ



け面の裏
長寛大工房吉
明應三斗二月吉

明應あり天保年間と凡三百五十年に及べ其細工の拙く古朴あり
さぬ左かろく往古を感想するに足らる

折當社の筑摩郡捧の庄本府下有田村將軍草創あり松小
築魔社神社と稱す社檀東西三間左右に二尺の脇格子あり南北之間前階
欄干掛寶珠あり床乃高五尺二寸首檜皮葺なり今も真摠緘
葺なり天文の以甲州勢乱入の時社檀も引倒さんとせし兵士等忽
冥罰を蒙り退散とすの傳は往古年中祭式
正月朔日戸帳開 同日弓始 同十七日歩射の神芝 二月十五日猿樂
三月三日鶏合 四月八日より十一日迄兒の舞 同廿五日より晦日迄龍王水天の神

事 五月五日菖蒲切の神事 六月十一日悪魔降伏の神祭 七月七日日生祭

八月十五日放生會 九月九日新酒乃神事 十一月八日神樂湯立

十二月十二日松定の神事等社傳の舊記にありける四社乃延喜式神名帳
小漏らるるついでに記すなり

○官村大明神 城下の辰巳 祭神 上諏訪健御名方命

○天満宮 同社小 慶長に頃小笠原康継田村より爰に天神を勧請して官村

明神の社壇の北小建並べたる大門先小馬場あり天神馬場と号し京都

北野乃右近馬場を撰せしと名本社を左右に列して園乃如し

社内又万高守護神の祠あり事代主を祭る此例祭らむより正月十日

初市立とて塩をひきくすむる松本より三里程西に一日市場といふ在所

小燈子の社人といふ四人あり初市や地蔵清水といふ所や塩をひきくす

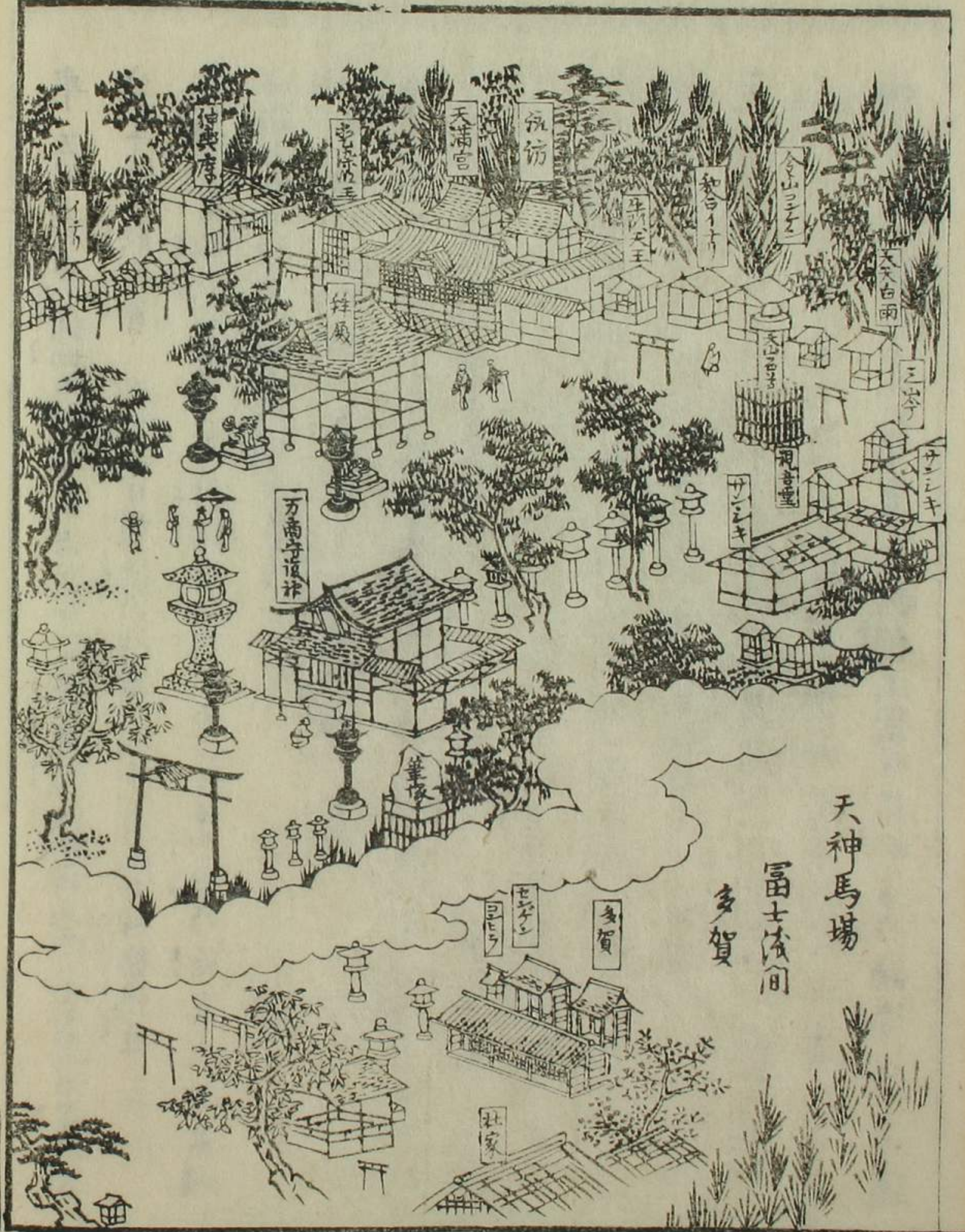
が地蔵清水といふ今本町二丁目小飯屋と稱す神樂を演じ其床あり天

神は社人塩をひきくす事と執行し當日未明より初市立とて遠



宮村
大明神
境内

立まゝの
言箱八雲の
新屋凡
中
松本ノ里
板飲堂
長親公



天神馬場
富士法間
多賀

近の貴賤美服を粧ひ袖を連袖く群衆を驚かすに実初春に毒氣を食ふ

永禄十一年今川与北条合謀禁商賈絶甲斐鹽漕甲人大
窘以武田氏之所統皆山国仰鹽駿相也越謙信聞而嘆曰
夫二家不能以武加甲乃困人以卑怯下策可憎矣甲雖仇
讐其民何辜因贈書于甲曰余与足下所爭在武駿相下策
余之所惡聞自今通商賈給以北鹽請信意取之遂下令賈
人曰務平監價毋有擅利既越甲水陸轉漕相接甲人深服
其儀

里光話

斯有乃れ越後の大將是を聞今甲佐小塩場く美民疲勞の虚を討
むと駿相の卑怯仁義の道小差を惡むなりとて書を甲列に通
殺万騎乃塩を甲佐西園小融通せむ衣に於て美民老若群衆
く悦び索ると早天小潤雨を降るが如し此先祥を以て今に在る迄
毎年睦月十一日れ初市に市神の宝前小塩を供へく群衆の諸人
小場よりといたりには何と形む

初市と擧る後ひ辞

かきほくもゆりれと云ふもあやれりされ榎原のむれ市代小八十平
倉とりの水無あて飴を造り飴成るは鋒及れ威を修りて中あつ天の下
を平んて改祈すて結自ら成るより天業を草創されて我かくぞ
あまれたる人はあくに賑ひあこの年月を歴すに水篋前信徳と
唱ふる深山をそと家居たぬ隈にあつとら櫛なふ乃は葉れ聖くは沙
葉所の名よけのそりて飴賣る家をもはるるにありきんくはあを
永正の頃ねねと株きけれされ時彼の町いあつ所小伝るりて業ゆ
ちふや今は睦月のやをうらまうひく日八衢小伝ををせられの久れ
咽ゆく去路よりみどり思をよふふ小よけひく物累ふたトせんを
すねあまをせり後分れ市なりけれ
諸國の商人建る幟も春風にゆるるに種くは捧物に室の心をたうて
所せく実り信存れ繁昌想像る

○大寶山正行寺

東流寺本坊と稱す 本堂十二間四面 太子堂 經堂 佐々木堂
鐘樓 寺中四ヶ寺 妙勝寺 玄正寺 芳仙寺 淨信寺

當寺開基も親鸞聖人の弟子了智法師なり俗姓は近江源氏佐々木乃
四郎高綱なり既小武門の業をほご智謀武勇兼備り平家追討の砌々
宇治川の先陣小其名を海内は夷り石橋山の戦ひも血戦して勲功を天下
小ありつゝ然共源平は盛衰夢乃おやくたるを親し終小金剛峯寺に宅
り出家し真言密乗の法を授けぬとせ世塵猿猴れ情猶也くを妄念
れ闇昏くたり哀れ直の智識ありば聞法の益を蒙り迷ひの夢とに
まさんめのをと思ひ續る折くも善因爰に招くや吾人乃越後國
小遷謫し々他力易行の法を弘通し終よりと國遙の野山を分
け越り國府小より聖人よ謁し時機相應れ法を聽聞して立所に
往生決定の領解を究多かり此時法名代釋了智と賜り叔建曆
元辛未年吾人越後の國府を立善光寺へ參籠ましくく國
東へ赴き終り了智は是と供奉り度に曹師の命により當國小孩り

栗林村よみらく草庵を構へ一向專念の義を以地小始く弘通せし終
小此所ゆく往生の素懐を遂らるるよりまより血脉相承して他力易往
の流益繁昌せり爰に當府武田信玄持城より頃當山の縁由を問
召栗林一郷除地諸役免許乃朱印と賜りける其後文祿の頃石川玄蕃
頭菩提所となり栗林より城外六九小移し後又此所に移さる石川彦忠
敬のわまり同團波田より所小殊勝れ阿弥陀佛の灵像おくることと
求る當山は本尊と成し又を子堂の本尊ら放光の老子とて其
濫觴は同團安曇郡丹生子村 當山十二代目 近所小満仲とより所より其地乃
古本乃空穴より出現し終りゆ

靈寶

- 一四尊連座御影 但上下 御讚 親鸞聖人御筆
- 一同御寫 一如上人御筆 一六字名號 蓮如上人御筆
- 一石山御本山御禮御本尊 教如上人御筆



大寶山
佐々木
正中寺
寺中
芳仙寺
玄正寺
妙勝寺
淨信寺

通
清水

木曾山
義仲院長持寺
寺中
西林寺
覺應寺



本堂

大工堂

佐々木塔

隆樓

西林寺

芳仙寺

基所

玄閣

大工樓

本堂

西林寺

西林寺

一放光聖德太子 太子御自作 一佐々木高綱曹太刀

一武田信玄公御朱印 山が三郎を奉るると有一軸

此外灵宝畧之

遊行代々の上人當國行化此砌山當寺に傳を止らば寶号を施し教万に奉
類を化益し其暇あり有明山の和歌と録し終一人則六幅を納む

五月五日今宵晴らん雲間ある彩の細野に有明の月 号仕

つとまきこ有明山の月影とぞや影く末れ道は遠く 尊通

むくまろくろくはくは照し次孫いひゆに有明乃月 賊國

あみまよふ人アやならん有明の山乃大照し以法の月々け 傾心

袿衣きつゝえみし有明乃山の月又る神をけける 一海

わいのやにらちえんと有明の山のくらく照し月影 号如

或が曰佐々木四郎高綱と頼朝公の約諾違變の事と憤り既に異心と挾む
死に大夫坊覺明是を聞て高綱一書と送て是を諫えける高綱然者少て

その二句此意を悟り謀叛を思ひ止り其決心せりとまかせ

残水小魚貪食不知時渴 糞中穢蟲爭居不知外清

○本曾山長称寺 城東上横田町 正行寺の前在 親鸞聖人越後の小丸山の配所あり五十年還

留の寺なり其弟子義延坊念信の俗姓本曾義仲の二男朝日九義基乃

陶基の佛園なり建曆二壬申より明德元庚申年まで百七十九年小丸山に

在住の町子細ありて同姓の旧縁を尋ね本曾福鳴へ移住して百九十三

年同本曾左馬頭義昌の代わりの織田家の為に彼地を立退同

國安曇郡横沢村小閑居一元和元乙卯年本曾の和泉町へ移る

寛永二乙丑當城主より寺地と賜り明暦二丙申替地あり上撰

田町今此所へ移るかくの如く寺地所へ換るといふと聖人より

法附属の什宝も其傳来せり

一落涙阿弥陀如来 惠心作法然上人親書 聖人侍安置仏なり 一五尊連座名号 祖師聖人六十二尊

一灰骨御真影 聖人九十歳 御往生の形影 一真行草十字名号 聖人侍真筆 日本三幅の其一

一 白蕉十字名号 聖人清真筆 地蔵本曾家のちりり

一 清珠数 聖人清出家の時青蓮院 茲鎮和尚より拜領あり

一 初筆名号 布袋九段 六才の法華

一 義基懷劍 藤四郎吉光 九寸五分

一 光明山念來寺 天台宗彈指言流 東叡山三屬

一 源智井 宮村町 井筒亘八尺高九寸清泉涌出て當國第一の名水也

一 御杖 聖人法統罪の時 関白兼実をより傍一本

一 義仲太刀 兼國吉 二尺三寸

一 義昌短刀 長船勝光 一尺一寸

一 餘を畧之

○ 源智井 宮村町 井筒亘八尺高九寸清泉涌出て當國第一の名水也

○ 光明山念來寺 天台宗彈指言流 東叡山三屬

○ 源智井 宮村町 井筒亘八尺高九寸清泉涌出て當國第一の名水也

○ 源智井 宮村町 井筒亘八尺高九寸清泉涌出て當國第一の名水也

源智井の圖

造物作來母ふ神美哉

一美良好周汚亦て扱

去清水化地を平

乃成德

信松園

家井説

初代源智井の

水神祠

其の流るる

と代の愛と

すのりの甲

宛奉

漢事始

淮南子三曰伯益井ヲ作ル

注益舜ヲ佐テ初テ井ヲ

作ル世本呂氏春秋共ニ

伯益井ヲ作ルト云世本

又云黄帝始テ井ヲ穿リ



源多舟戸若あり成江
ふ後あきすかか付可す
糶制札うわ出者也

年二月

濱も令内
花押

付舟戸へお降あつて桶曲物と
りりて水とらみ又舟戸れ
内あてはれりく入屋へ
右も可おあめ者也

年四月 石川家

此井水ゆく製する所の銘酒と。白麴。不入火。松浪。白菊。藤浪
諸白其外名産。絞糸。真篋籠。羽子板。おひな。清水の里紙
。登鮭。円鱒。烏川の硯石。生坂良等及び当地の名産といふ中其に
紙類 良等諸國へ運送するも夥しといふ

生坂良清前生坂を世に賞する其根元と尋るに犀川の河上小川並十
三ヶ村といふなり其内れ上生坂村おく製するを良の上品といふ慶長の
以上生坂称名寺に禅僧西園筋修行し侍りし物長寄おく煙草乃

種と多く持帰す我菴室の庭に植く作すといふは廣き異
村中より多く作り出諸國へ運送して産物となりし今を其
寺中に出まざるを上品といふ生坂前生坂といふ上生坂村に生くると

因白

落穂集

大道寺友山著曰我等若年の頃或老人の物語仕ゆたことすも物古来無き處
天正年中切支丹宗門に事せし世に記すは時節よりあること始りしと云ふ元來の
南蛮國の土産の草と云ふは右之のやいおの後のきせらるるなり細工もまれは直に
又むつりくまの者お求すきりりり子に付竹の筒のわと先ふふしこを大に施す明光の
方と火皿お用ひく相仲とつぎ必しとて其えい西園筋より修行し中国五武内おく
我人おての中しりし東筋お持たたを修へり右後を権も不存にせし何の以り
假しとておまをせしは細工人もおりりりり竹の筒とせらるるおりりりりりりり
伴の老人物語仕る事には然るは其の初とすこの久き事お不存にせし又云た
をさと所禁制の義の御二代目の式お直之は畑草作り中同古旨諸國へ運作出を以て向後
竹撤内お持くることなべいせりし御法度お作付らるるなり
。寶鏡集曰たをこま年中始り南蛮より賣すを付長崎馬場お植其後山姥國花山お刻
賣是を花山畑草といふ又吉野丹波へおく諸國へ蔓延る又云

条

一たてこび半お精進の年純上の賣買の者とも見付し葦の双方の家財をこび下也若又折時
決り付は付らしたをこび賣主を西に押並て之上則付る馬荷お下改出をのこび下事付
何れもたご能へりしは半
右、執事内(お意)をわねはき作出也依る執事内件
天正十七年八月廿日

○物茂卿著 曰五百年以来茶あり百年以来煙草あり世ハマアに事多くあり

○和事始 見原氏著 烟叶の条に曰長十年の如く始り日本に傳るその後諸人... 名を想思 草を信人 是して... 肺を通暢する事と喜ぶ故 小煙の氣口小入て直に胃腸... 宗氣一呼に脈行て三寸一吸に脈行て三寸 登夜に一万三千五百息... 身小周り 常度小隨... 俗華奴婢の是を喰ハ責むに... 貴なる半ハ甚ひて... 塩尻 聖世留 蛮語あり 朝鮮小評謂烟筒なり又その竹をらうて...

○北林山海野極樂寺 本町の右 浄土真宗 京都本願寺直末なり

本堂 十一間半 樓門 八間 抑當寺ハ親鸞聖人の直弟廣專坊ハ開基なり

俗姓々 清和天皇の皇子貞元親王八代乃孫々々海野信濃守

廣道の孫小縣郡海野の住人海野三郎重廣なり 聖人北園化

導一々々砌弟子と成り廣專とつ然るに海野の辺に廢寺乃

ありきれを師命小よりて再興を九字十字の名号真筆れ數ハ形

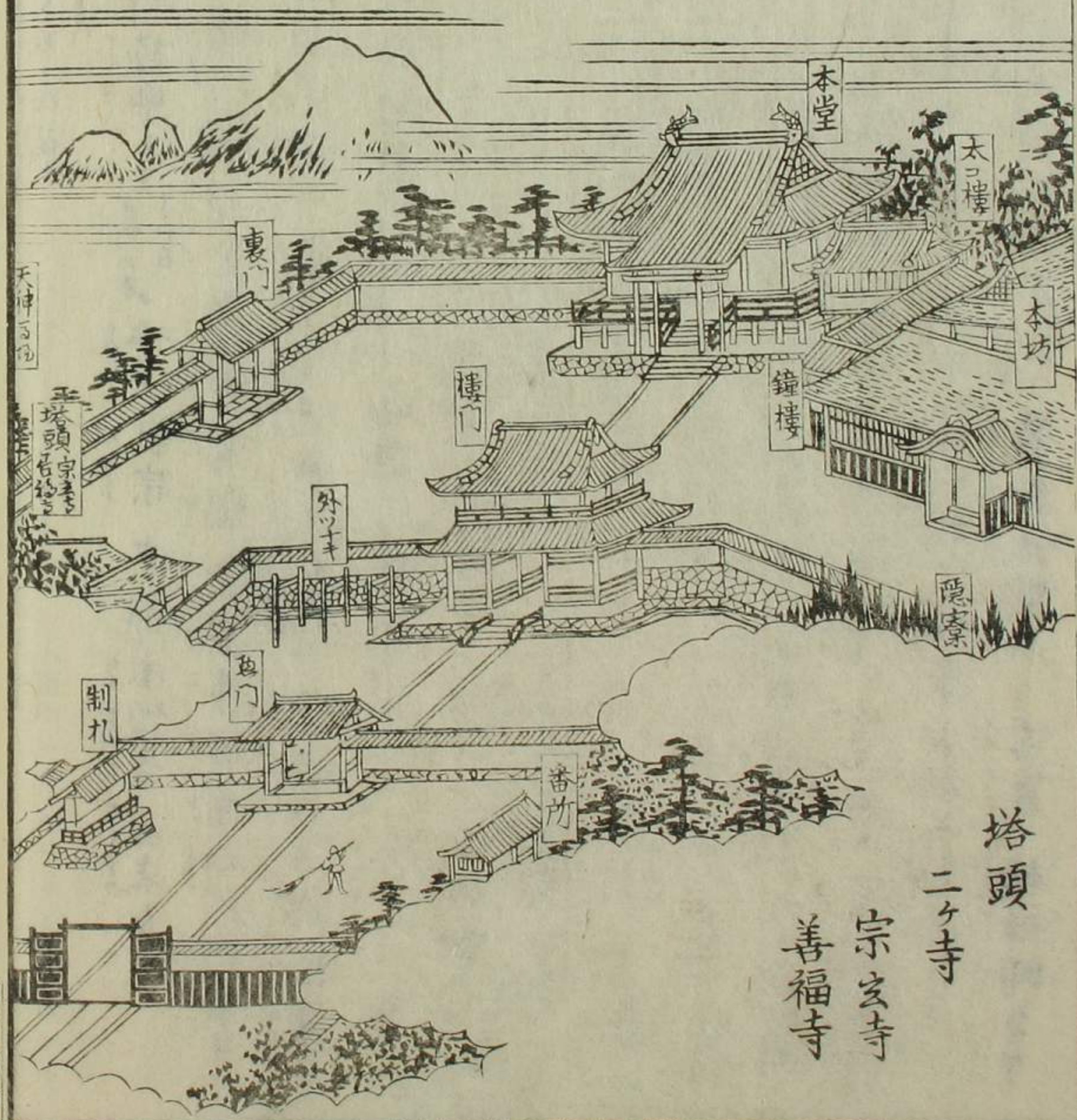
見の品々を賜ハ極樂寺と号ハ茅七代蓮智ハ蓮如上人の直弟小

上ノ北園東経歴の砌小を當寺に逗留一終ハ六字ハ名号并に

真筆れ教くと賜ハ茅十二代了專れ時に武田信玄の令により筑摩

○龍雲山廣澤禪寺 本東八丁斗 曹洞派開山ハ雪窓一純禪師なり

北林山
海野
極樂寺



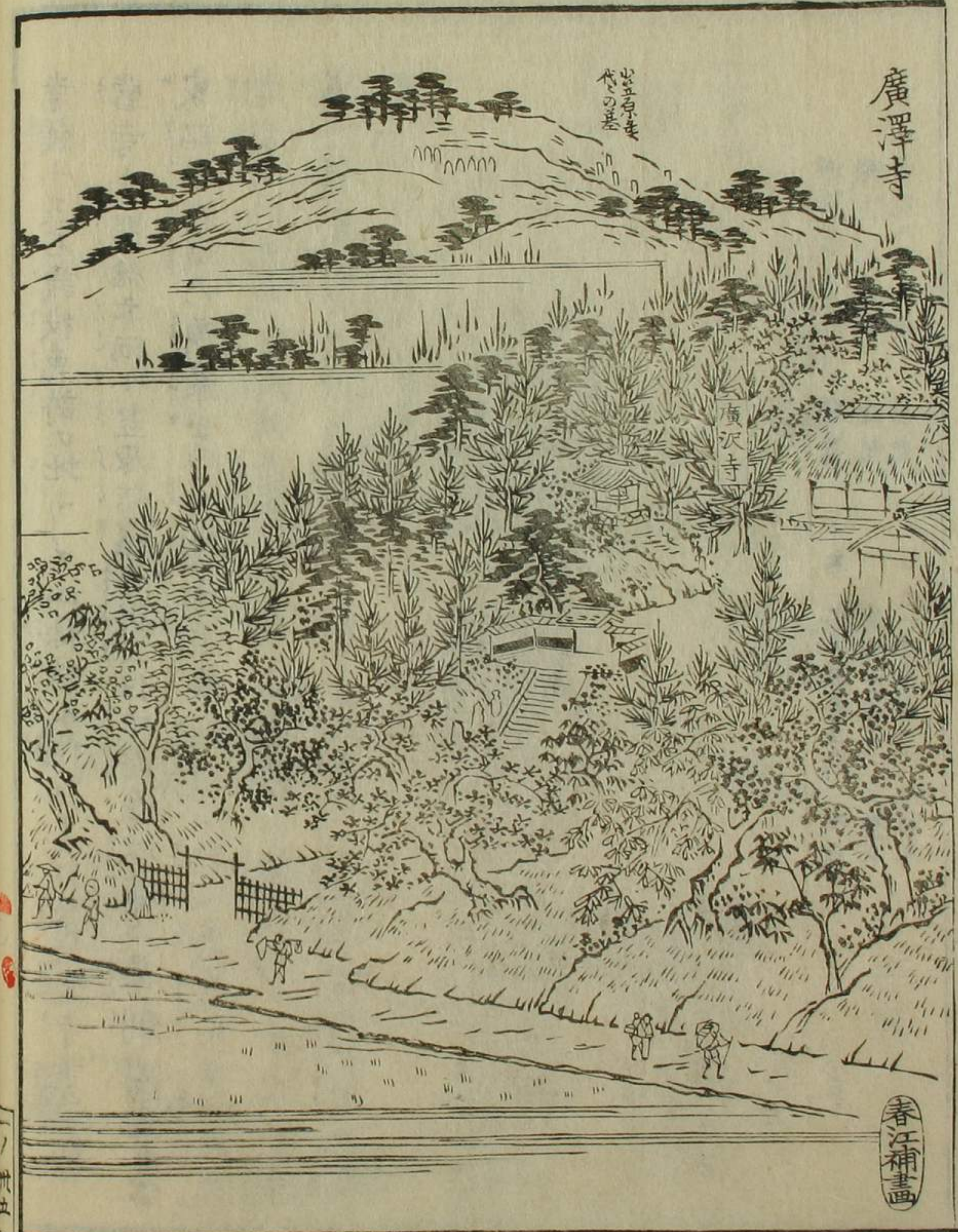
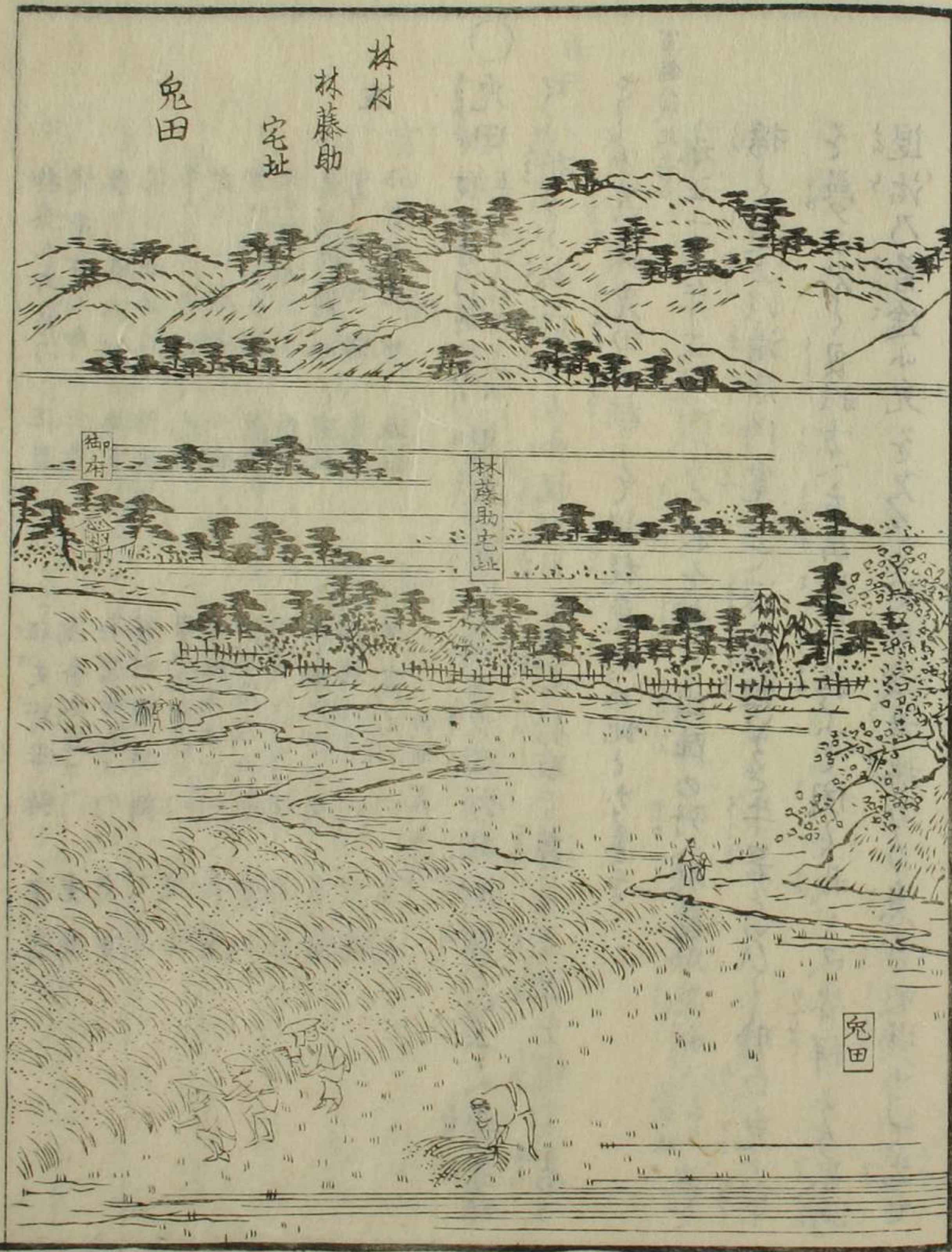
塔頭
二ヶ寺
宗玄寺
善福寺

寺領十五石諸役免許の地にて山林竹木伐採は松林茂寺十ヶ所
當寺と寶徳年間小笠原信濃守從三位中將源政康の草創にて小笠原
家松本在城乃頃累世の仁祠なり浪華戰場小於て秀政父子討死乃
刻從士に戦死三十人戒名俗稱を誌して靈位の左右に列し其節
義を感賞せりゆりゆりその俗稱を記し又二百年乃遠忌執行の節乃文
わり乃左に記載して是を憐れむ

元和元年歲次乙卯五月七日秋 先君兩選公法性公相与戦死於浪華是時從而戰
死者三十人今大詔和尚每歲五月七日致祭于 二公從死者其從与空之其厚意豈可
忽乎今茲爲 二公及從死者二百年之忌因与矩好貞根房虎等相謀以牌子上信
州廣沢寺使從死者長蒙師之進香云爾 小倉藩 遠藤信成 謹識
文化十一年歲次甲辰五月七日 謹上

鹿島矩好 勝野信由
三宅 信應 宮本貞根
進 房虎 光 幸參
遠藤信成

右賀与吉
西牧八郎右五門 隆昌
増山與兵衛 定信
市岡八郎兵衛 兼光
右 仁木勘右五門 政成
岩波平左五門 重直
二木庄左五門 政元



鈴木九郎右衛門 三重
渡邊庄七郎 三長
森下善兵衛 為重
落合喜平治 盛重
多々井六兵衛 友重
武井治兵衛 氏重
横川茂左卫門 景直
大日向八郎左卫門 重吉
青木内藏助 重繼
嶋立内膳 貞正
小笠原主水 政信

征矢野半弥 宗廣
浅香太左卫門 重政
白岩市右卫門 光重
新村傳兵衛 正吉
百束治郎右卫門 勝清
原弥次右卫門 長重
江本弥治兵衛 實次
川井庄兵衛 長吉
佐藤九郎兵衛 長真
香坂三五郎 安房
林甚右卫門 高則
田中五兵衛

○免田 廣沢寺門前あり 里老の話にむ 長阿弥徳阿弥といふ人尋来は

廿一折り 林藤助大少悦び自ら免を射取て捧ぐ元旦を祝し来り

軍鑑八代記上畧

永正十五年正月朔日人教を催し出陣の所へ林藤助忠利とあり免と
掃く進上り清康清寛と源義経いまだ牛若といひ時白免と鼠
を夢小兄と良れ方へ立出世に出給ふと聞く我も又安祥より忌時
退治乃首途小免をえると目出度奇端かり急ぎ吸物して出せ

と修りて林をさく今度の合戦小勝利を得侍大将にさき間粉骨
を盡まへさきよ 宣ひて酒下され再三悦びたき中畧園崎へ移
移ひ系圖を假し改めて世良田と名乗らむ忠政娘を連へ取林を召て
約束に如く侍大将小仰付られらむ時より正月朔日の美に免伐
用ひしと申ふとぬ

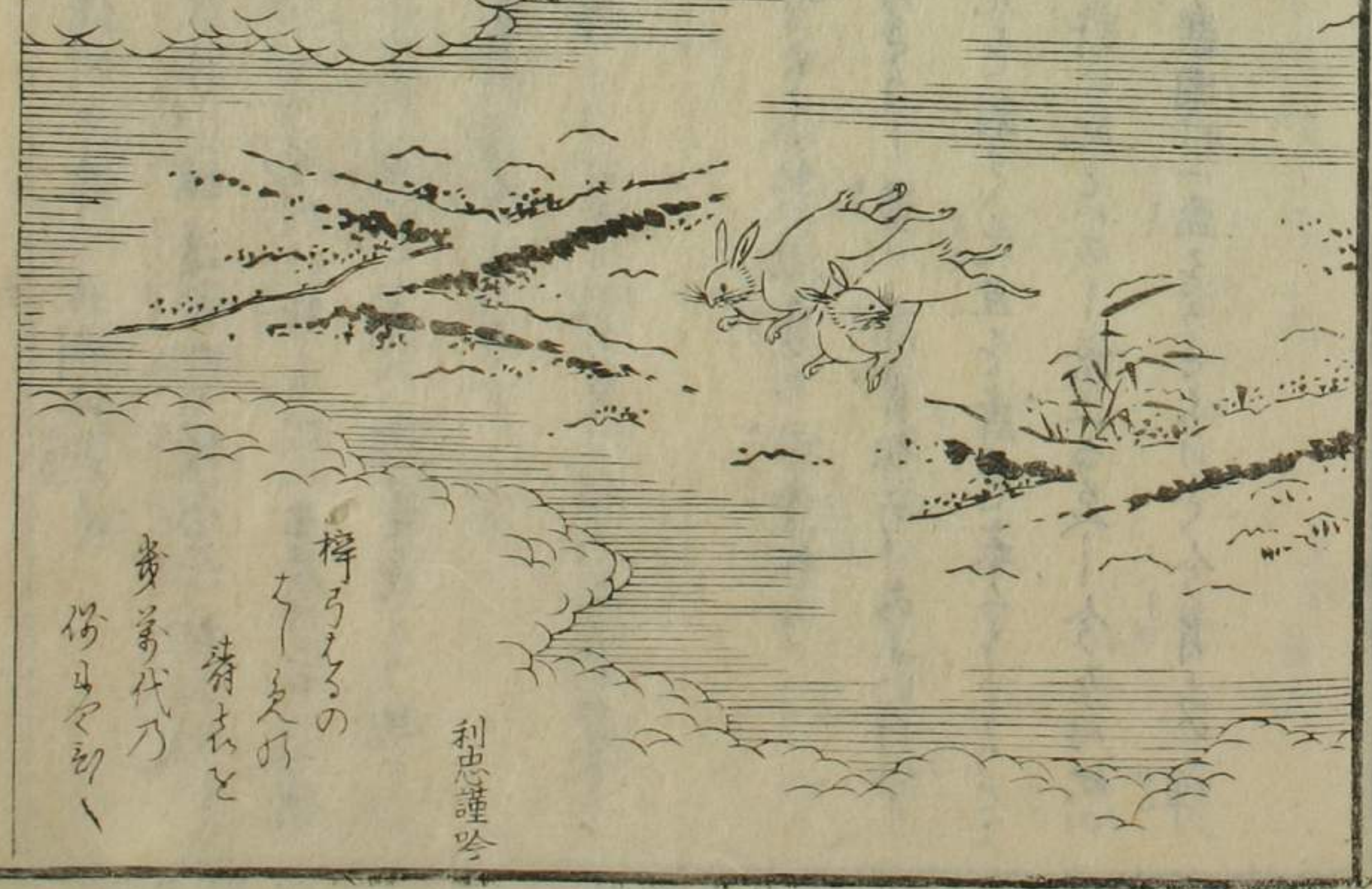
或記上畧

藤澤を立出々信州小赴く粵に小笠原清宗が三男小林藤助
先政といふ者あり持氏在世の以数年近習に勤仕しきる處小諛
言や多所領を没収せしむ浪々して名字を改め林と号し信州乃
山家の蟄ま有親有氏在鎌倉に時睦馴く互小心易かりをば十二月
下旬藤助を尋く彼所小到る先政は悦びく是を饗せんとき共
一物なり十二月廿九日みづる雪を分符て免一疋を得り翌永正十二
年正月朔日有親父子に難者を献し且免の吸物を進む是よりして免
の吸物を以て官家に祈嘉例といふ其年中後近藤助が本に月旦と

林光政
雪中に
免と
栲



依義氏の
天下に玉
一の歌多く
ある害と
あはれと
是と並まに
我の
依と
栲
代々の天子諸候
玉家
よに
あはれ
栲
井の害と
免と
雪の中
奉つ
御



梓
つ
春
乃
乃
乃

利忠謹吟

送らるる同年六月小有親父子信州を去り冬州小赴く

監風

或記小曰永亨七年十二月天野民部少輔遠幹已が領内秋葉山州に於て免を狩獲信州林氏某小依り清康殿に献ぎ同年正月清康殿謠初に彼免を羨し入りて官家歳首小免乃所羨是より起と云又林氏此時落臺を献せり是落臺に權輿と云

此寺に免田を壽る文あり其寫を持てけふ人の見せゆりきればまを騰して爰小並ふ

信濃の園筑摩郡林乃郷廣澤寺と小笠原侯の由寺なり神祖いさご御代をひくうゆむつさう一昔高曾祖のあふけつせほひるに林氏何某雪中に走免を射く元旦を壽き奉りしうと一かふ小其名を傳く年税免許の地とい成し給ふる是し今か林の田乃其よくを又めぐらんと小昇平樂園に一盃をうとふけし今有るの禪刹ふらち臥せし

長押やうきん桑山子れぬる弓矢

京都 巢北

○林藤助旧趾 廣沢寺門前を北山際を今民家五軒程あり又少北の小高に

慶小石の小祠ありて注連縄を引榮く清府といたり此も松林ゆくその清府ハ昔乃鎮守なりとぞ林氏と小笠原家一族なり

△是より此山脉續く南内田村に牛伏寺まを擧ぐ此道條を五千石通く松本より境尻宿へ出るの閑道なり旅人の通らされども又場所の一二をまきと和泉村茶白山の麓小芭蕉翁の句碑あり

持はらまのごとくれぐりてかへ山路う那

とを成

○金峯山保福寺 筑前郡埴原村小あり禪宗 信濃百番の内四番れ所なり

本尊千手觀音 聖徳太子御作 秋葉社 本堂の樓門 本堂の前

稻荷社 客殿後の鎮守権現 十八丁奥の山上小あり 甚也科の木多し

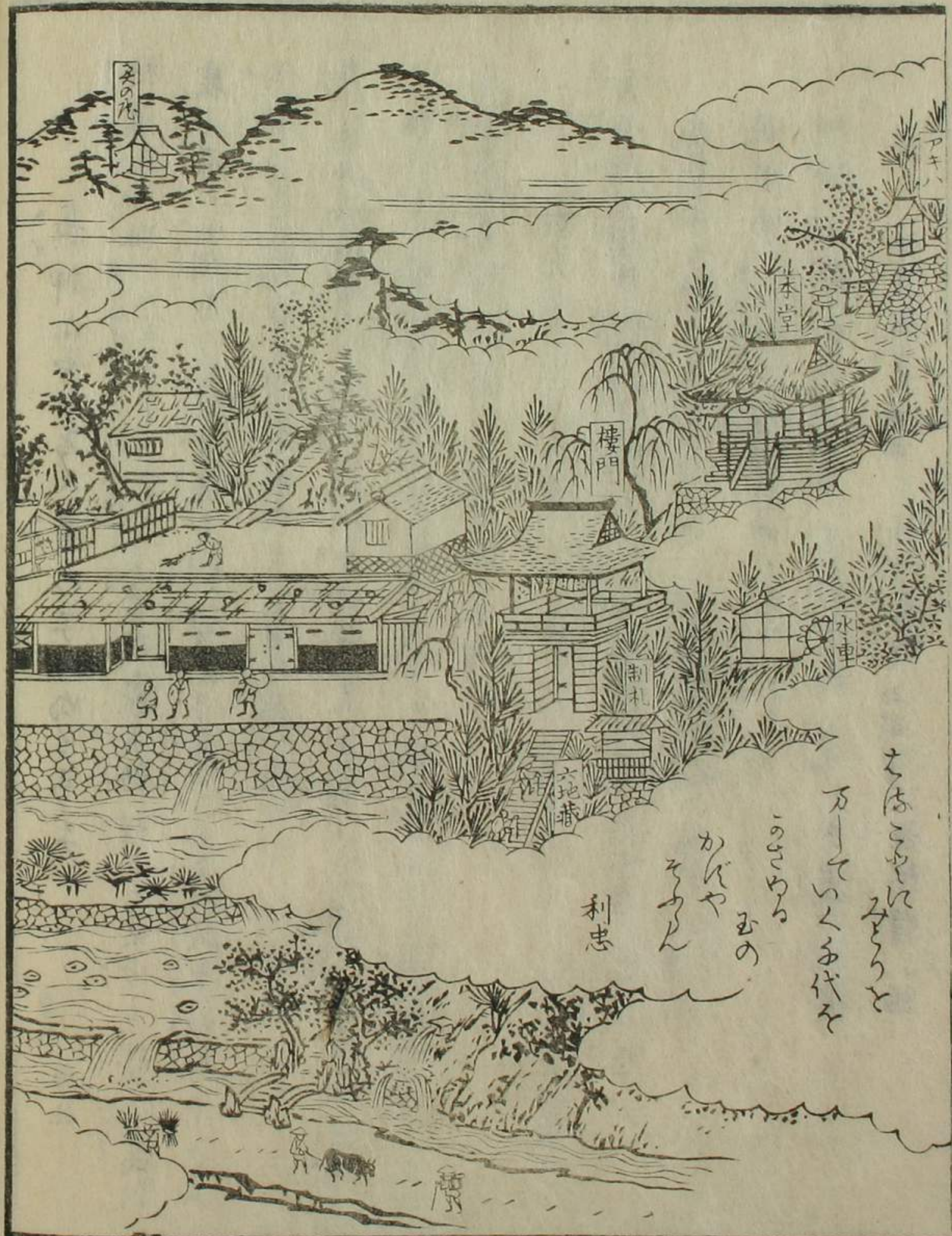
什物 心經一卷 弘法大師筆 普門品一卷 唐本 古畫の達磨

滝見觀音 唐画 十六善神 北殿司筆 涅槃像 一幅

金峯山
保福寺



是箇長松
樹
粲然聯壁
名
秦昭如有
請
欲易幾連
城
艸、庵
園、園



たはこやれ
みまうと
万一ていんふ代を
かぐや
そのん
玉の
利忠

當寺開基不詳數度の焼失ゆく什宝等多く灰燼を僅に存る物を祀ま
の慶長十九年に小笠原侯より再興ゆく割れを賜ふ

禁制

墳原御

保福寺

一 伐採山林竹木等

一 於寺内殺生く事 付依藉く事

一 年寄大寺の者波入寺事

右三ヶ条違犯く事有く者改留並寺中奉行取口

て有内理嚴守て付也の由件

慶長寅

八月十八日

云右を浦源秀政花押

○重玉松

客殿の前小あり冷泉為奉納和歌及び重玉の銘を刻ひくよりかく呼ぶなり
後其銘を板に寫して傍に建し是より又は九章御守等一より一首を寺に傳

此松高さ一丈五尺幹の圍八尺餘低枝四方小偃して東西各六尺をくり南と殊々長
くして十一間北に僅小三間小餘の枝節痛起りその五十有余恰も玉を重るに

似たり故小此稱を得實に比類稀なる矮古松あり屈盤する勢さなり臥龍

ともいへり往來の旅人も迂行を厭はず來賞をば

為泰卿より賜る御筆の寫 清銘を板に摸して
松のこころにきり

信濃国筑摩郡保福寺古松

銘

重玉

半免泰

ゆく千歳みやうとかさゆく玉松の法小光り名をみる陰

幾子代を重る枝老けけ茂る松と朽きぬ栄又きりし 為章卿

題重玉案

保福堂前古偃松霜雪已凌千歳冬楨柯不喬横平布
翠蓋宛轉紫煙重周旋一匝數百步步恰見緑雲從
條低雖非留鸞鶴陰多常藏幾虬龍不知上古夏后植
何問先時秦帝封靈根一託布金地顏色不改蒼鬢濃
道是栽松忍道者移來寸松今蒙龍又謂玄井渡天日
摩頂正餘此形容風菡白日碧波動長夏炎天爽氣鍾
曉羨流脂擊寶鉢夜有鳴籟應華鐘主人高僧禪坐暇

南埴原村
百瀬氏林泉
去蔭の滝



近望深處自為悚有時經行在其側人疑神僊倥傯逢

右寄題信陽保福精舍偃松篇

甲寅首夏東都曹溪老衲瑞林玄廣

此里に石壽軒雲雀俗稱中嶋とよ者あり和漢乃奇石を集く樂むと

他念かり予も其半を見付りぬ是れ又近江国山田に石亭が徒なるべし

石亭ハ江州栗太郡山田小あり夫格より廿丁斗り北草津沢より三十丁なり西のうらり山田渡口に村中に木内小繁とて家之

一に村翁あり此人生得若年より和漢の名石と好んく是を玩ぶ事

數十年に逮なり凡神代の勾穂をとり諸州乃産奇石化石天狗

此凡水入の紫水晶を都て二十余石を家藏とてと閑侍り

南垣原村小百瀬政武俗稱又兵衛といふ者りり天性和歌を好む既小冷泉家

の清門系に於るがハ民俗小在なり志ハ雲井小通ハ後園の山ハ一株の

偃松あり又遊あり麓小和奇三神を祀り松蔭大明神と崇む為恭卿よ

了侍教を賜へて

百瀬政武が庭小あり遊をまゝ留む

岩波をどろりてんせぬ千世の群

宿の繁榮をね賀すれ候

△是より八丁往南内田村に牛伏寺に靈場あり此の地ハ五軒を通て本寺より

○金峯山牛伏寺普賢院威徳坊筑前郡内田村小在真言宗属高野山

本尊十二面觀音 聖徳太子侍作 釋迦堂本堂の南小在 鐘樓同所小在

鎮守十二社權現本堂の東に在 稻荷社右に並 蓮池弁才天の祠あり

樓門左右の廻廊小四回八十 御供所本堂の乾小在 經篋客殿の前小在

牛堂赤黒の牛ニツと魚 骨堂以上方丈門の外小あり 鎌石山の中腹小在 牛額牛が鼻俱ハ山の麓の小名あり

△什物 唐本大般若經百二十卷表題全宗皇帝宸筆 十祖神 十幅

金胎西部大曼荼羅二鋪諏訪彦寄附 愛染明王興教大師筆

般若十六善神 五大尊以上同筆 阿弥陀如来惠心僧都筆

不動明王弘法大師筆 涅槃像堅二同中性院僧心亮範筆

追儼の面ニツ 太刀一腰 因孫六 曹の鉢一 陣太鼓の古胴一

武田道遠軒判物一通 小笠原秀政判物一通

抑當寺ハ往昔寺号カ一傳聞人皇十二代景行天皇十二年の頃湖より時
鉢伏山上の權現化して男子の形を現ト又法然の薩埵も化して女子の形を現ト
終小結婚を成し琴瑟の情歳を重て鮎羅小令ひ男子を誕む其成人天姿
操行や一能く農人と悩む世俗此人を泉の長者とより一説小健南方刀
美命 或ハ武南 則諏訪大明神の化身なりと唯海川水流以自在を得漂泛
より時小七月七日尾入澤に至く不測の犀龍小逢小犀龍曰子若我に逢
ハ湖水を北海に往く注ぐと即犀龍小乘く水内より所の瀧を渉る七日
七夜の中ハ湖水を北海小洒く言の如し今の犀川是なり夫より故に曰
烟を隔く一首れ敬に 室つと水さらけと道なる 廣き溼小川の犀川
犀龍をハ犀口といふ所小神に祀り獨鉢伏山小皈父母小相見一奉らんとも
ハ父母又化して元の如く愕然とて四方に顧むハ相分もく父々山上に在り

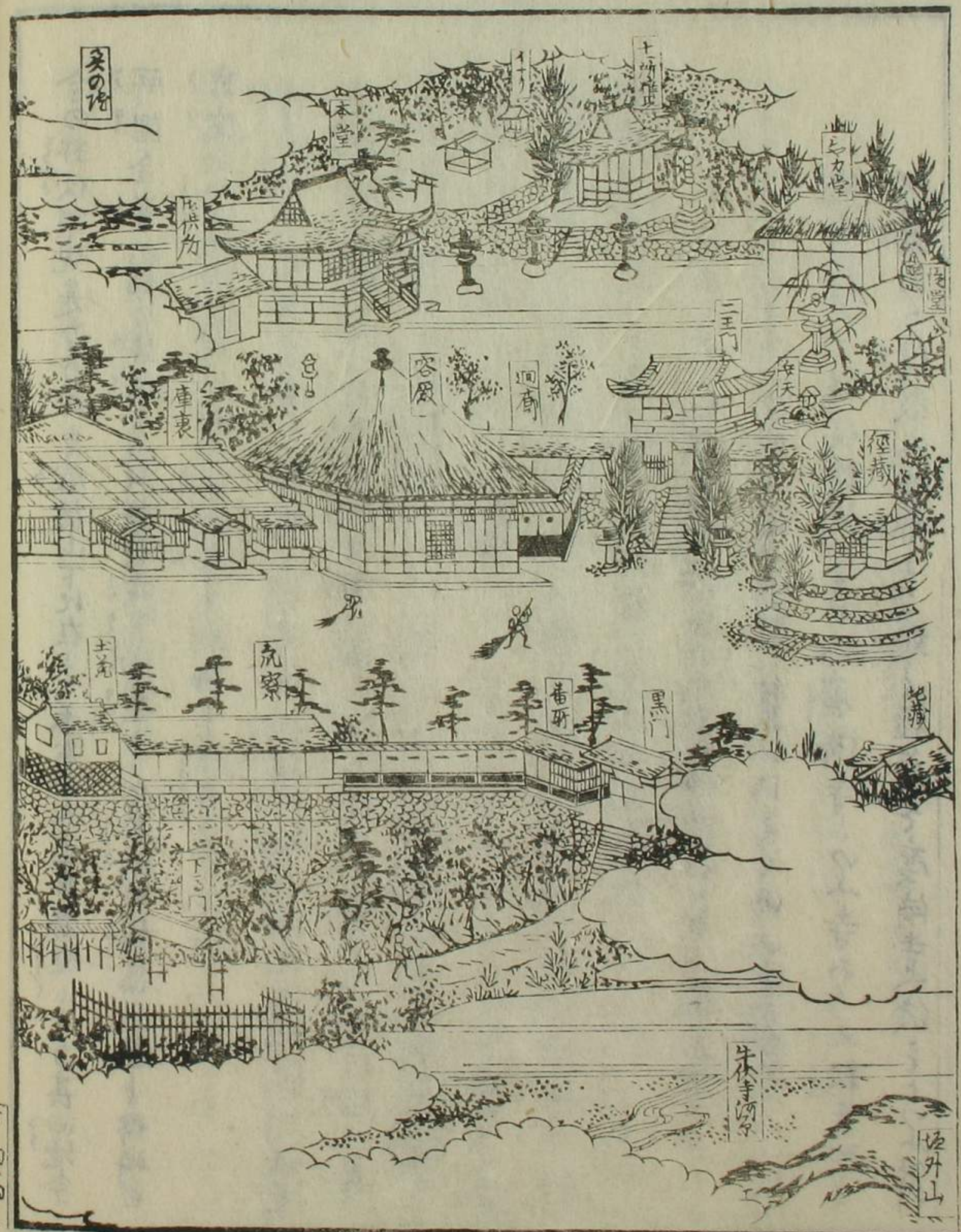
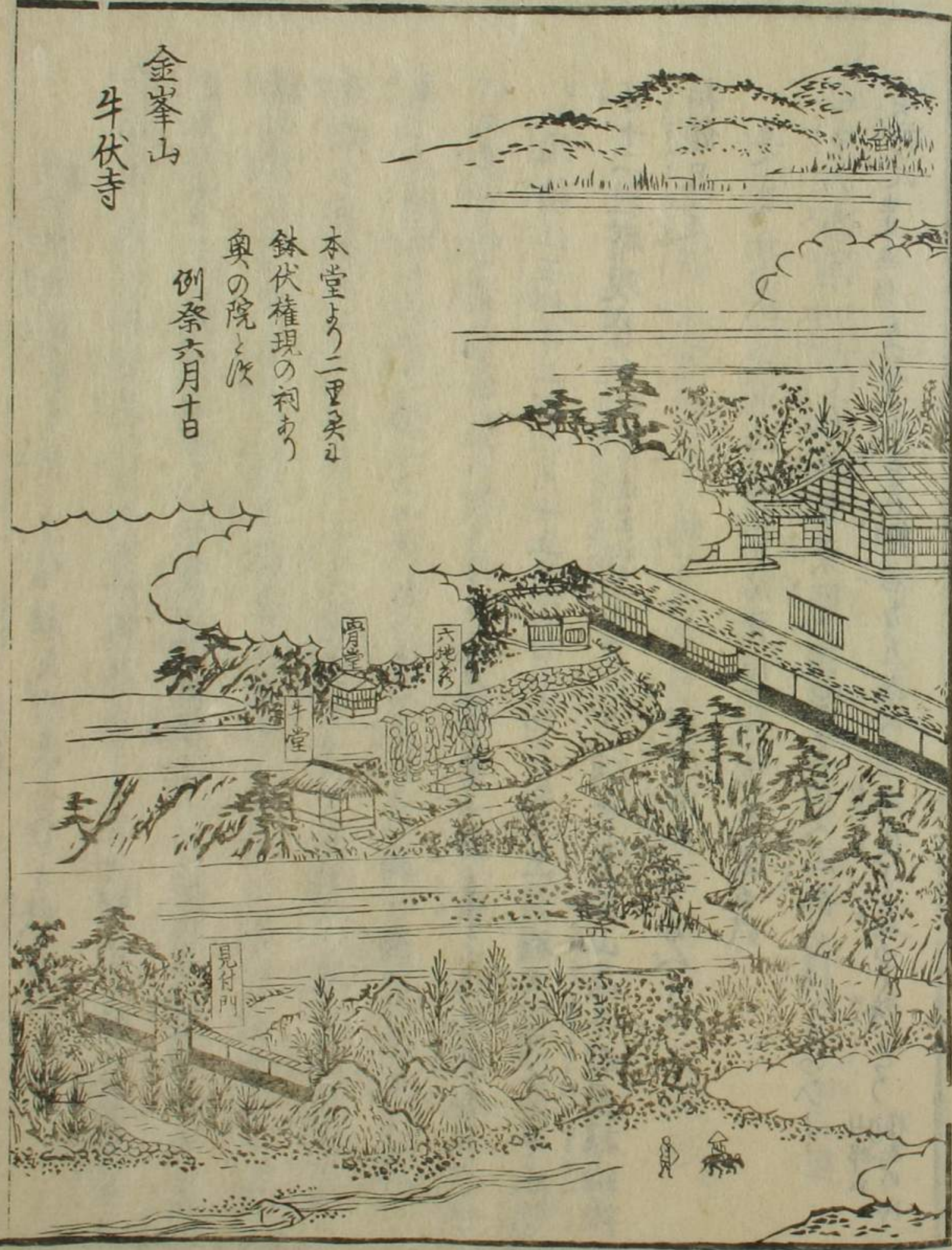
今の鉢伏權現是なり母々威徳山下に在り本有の太士靈應照く其曰地今
所謂金峯山頭の蓬堂なり此時長者了了然とて不測の妙感小應ト佛崎の
岩窠に入去ぬ今其所に社を建川會大明神と崇奉ふ

○當寺境内東西三十余丁南北十七丁南ハ牛伏寺川垣外山北ハ北沢川流也
く孤山の冥區かり其堺里圍を距る事三十余町山小據り流也以浴く亭
を抜秀を鍾く其風致超然とて自ら塵外の妙境神具不測の壯觀く
大凡寺号を按むらに一山巍然とて牛れ伏るがあやしく又牛額牛鼻
等の字あり所謂讚岐の象頭山の類なり 奥の院鉢伏山ナテ十八町
權現乃社なり社頭小掛る所の歌二首あり不知詠人

みまかむ伝説國の鉢伏のやまへ神祇のまゝとあふべ
るるくらに真根と睦む鳴神乃林麓小はくくゆふまを
或が曰む一鉢伏權現のまに廣濟寺より寺あり又新氏町と
ハ跡あり傳教大師都より始く経籍を廣濟寺へ渡すとつよ

金峯山
牛伏寺

本堂より二里外に
鉢伏権現の祠あり
奥の院と云
例祭六月十日



以寺院民家も廢して唯秋氏町といふ名のみ残る

當寺本尊十一面觀音の聖德太子所作なり。元除觀音と稱し靈驗著く
近里遠境の貴賤男女歩行を運び諸困頓禮の優婆塞優婆夷其外系
詣の旅人引とさしに就中保年二月七日轉讀大般若同夜戌乃刻
追儼の祭とて厄年け者ども麥藁炬を多く取持て鬼を遊の式あり
鬼二人法杖を持先へ幣とくは鬼の後小太刀と持て戦のさ烈し雪中
に大筆を焚並く白昼の如くする小童男童女群衆して二山震動せり翌
八日講讀仁王經十二部二月十五日三月廿四日朔日五月朔日六月十七日夜鎮
守十二社權現祭礼但六月十日奥の院
淨依持現祭礼七九十二月十二日開山忌冬報恩撰論議
結願且定所化勲功の年薦等四時の勤行間断なきべし
是より北へ戻りて松本の東から東間の温泉をさるる
白糸の湯松本より東へ
十八丁にあり往昔東間の温泉といひ又山部の湯といひ
順抄に也末無倍とのせく古き郷名なり今其郷失く名のみ残る山部の
順抄の序

講の文字を憚りて山家と改る

延暦の記小臣子の礼必遊君講

和名抄筑摩豆加万
国府

日本紀

文武天皇白鳳十四年壬午遣輕部朝臣足瀨首新家荒田尾連

麻呂於信濃令造行宮蓋擬幸末間温泉歟

同紀

十三年二月遣三野王小錦下米女臣筑羅等於信濃令看地形

為都是地歟同年四月三野王等進信濃國圖

宇治拾遺

今いむく信濃のふはくはれ湯といふ所ふよる河の人乃あみり系菜湯
あり其つらりたる人の夢にるやうにそれ年の時親音ゆあとの
なつといふやうなうめくうおとまさんまをよにいつるやうし三十
なりけ男のあげらるきかあやのまきさくちごらるるやふらひ皮ま
きられらゆらとんのらをきくらる夏毛れむらねはきそあげの馬
にまゝくさんくねそまを教書と知りまらるやうたてんくまそめ
髪れてあわさくく人へのはをほりたれた人ゆつとそ其湯ま集つと
うさり形しゆをうえとと掃除し志を引花番をふまらりお

白糸の湯



驚いて待奉はまうく午れ時さびりたにさる程ふたけはさふあふつ
にあらうと見ゆる男のわらうけはめさるるその馬をたふさ
やうくさふ見一にさるるまうらぼの人ふらぬらうくび男た
驚いておまぬらうらまよぬ河の人よさるるたはさるるた
事といふ人なり信乃ありたるがまをさりてひさひあておぐみ入
らるるり人よりてまらつるなる半ばおのまは又くさうにやう
つこまらうらる舞かへつこの信人のまふさけるやうさうの
男のよぬおのまらつて馬よりさて右のわらを打折る
まはばまをゆでんとてゆて来るさうつてとぬらうら
にんくちうまらうくおまを馬の男さるるびて我身はさる
者うらぬらうはさふちうらんと思ひくちやをさひた刀くさ
ては降ゆたりぬくさるるさるる万の人たれあさるる扱
人ので来てのさうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
香江補画

つりられしつを因く是が名を馬次記とせしむる法師に
たりてのち横川小舟りきりかてり傍於の舟子にりて横川に
きり其のらに去依の園よりゆりりて

夫本
つらうまのえくげんうれ人のほくまのあふ布士の煙り 殿門院
修徳大夫惟正志をけちりてゆりて
つらうまのえくげんうれ人のほくまのあふ布士の煙り 殿門院

法拾遺
つらうまのえくげんうれ人のほくまのあふ布士の煙り 殿門院

白糸の温泉を湯の原といひく今も猶盛に諸國より湯治の人其湯に

賑やなり又是より北八町程隔て浅間村に温泉あり是太領の湯なり
領地あり 寛保二戌年秋八月朔日大風雨洪水して山崩し浅間の人家三十餘軒と

押出り一村をたは是を下流るといひ時より上下二村と分るる所あり上
浅間小 石川志々 飯沼源三 下浅間に 二本寺の井 石川若くは 飯沼源三 赤田忠兵衛
桂田屋仲七 小竹長平治 宿屋屋中 中野屋中 中野屋中 中野屋中 中野屋中

皆内湯なり此温泉の尋常と異り臭氣なく清潔なりて飯を炊
き茶を煮るに風味美く功能又著く遠近の旅客浴の間に宴を侍り

乃明及月の暮戸に倡言のまどとえは是も又養生に一助なり
漢事始 辛氏三秦記曰秦の始皇神女と遊ぶ其昔に侍り神女始皇に唾

しき瘡を生じ始皇恐て謝を爰に於て神女始皇の為小温泉と出
きて洗ひ除く後人は小依りて

漢武故事に曰秦皇の湯の邊小砌り其上に宇を起つ漢武帝是を修
飾せり

三秦記の説甚く虚妄なり温泉をぞ始皇の時に始らんや博物志に
凡水其源小石琉黄あま其泉則温也といり凡地中の陽脈の凝り湧泉

温暖なり其陽氣をかりて病癒と療ふなり有て天地をさくより
後自ら是等の吏有べし漢武故事に記す所を見よ温泉の上り

屋宇を設るは始皇より始り

大凡温泉の發源その下必朱砂ありて流黄礬石あり蓋天地至陽

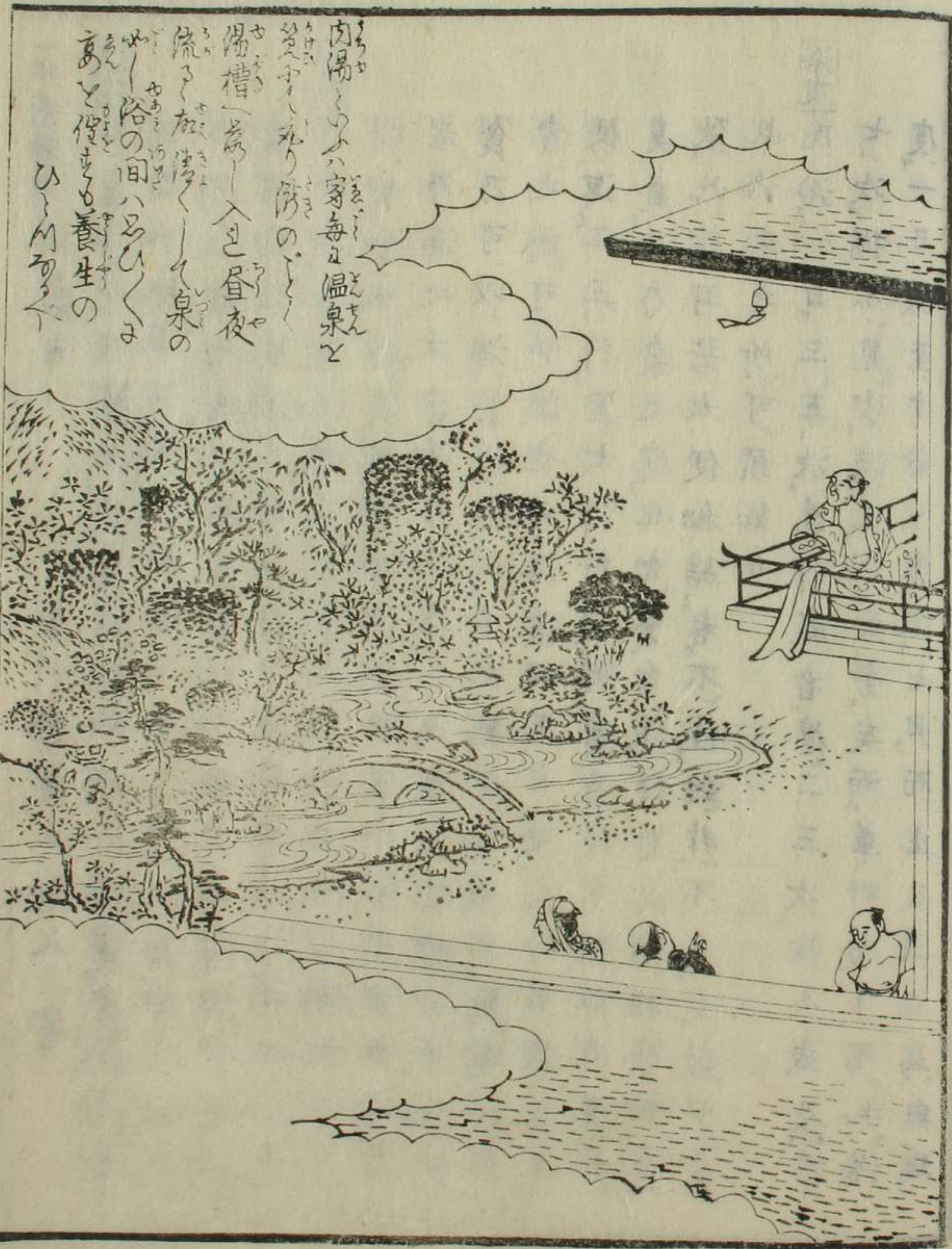
此精の結ぶ所なり

此精の結ぶ所なり

此精の結ぶ所なり

此精の結ぶ所なり

此精の結ぶ所なり



試効

助氣温體破瘀血通壅滯開腠理利關節宜暢皮膚
肌肉經絡筋骨癱疝痲痺痿子痺脚痺攣急諸痛
消腫治痔微瘡下疳便毒結毒發漏疥癬諸惡瘡結
毒撲損閃肭婦人腰冷帶下大凡痼疾怪疴洗浴効

浴試

凡欲試浴泉之應否者方其初浴也胸腹飽滿不思食
能食食味益美此湯之得中也若胸腹飽滿不思食
者乃湯之不當也勿浴隔一日再浴前證止能飢好
食乃可以浴若復浴如前則終勿浴浴必致害此浴
者之所可必識也又浴後四五日及七八日或有大
便瀉二三行至七八行微瀉裏急後重微腹痛糞作
臭氣此乃泉之應也勿驚勿治後自止但非皆然多
致此證耳若大便秘結者不佳雖非不應見效必少
此浴者之所可預知也

浴度

凡浴一日三五次為律羸者應二三次強人或及六
七次猶不見害過之則疲勞矣而草野駭夫不知浴
度一日或至十餘次僅限七日而止此雖正為無病

浴禁

者預防之備而亦徒憊而止耳何能治病觀世之浴
者槩以二臘為限延及三臘呼為緩治以予觀之則
未也大畧浴者多是痼疾沈痾非二三臘之可速愈
是以自三十日及至五十日或半年或周年直以病
已為徵何以日之多少為程
凡浴中宜須避風寒外邪蓋浴必汗出腠理自開易
感風寒故不戒慎則必致中傷已不可浴又且啓勞
傷之徑可不深畏乎次禁生冷肉食浴中飲食宜熟
者不可喫生冷肉必致滯傷若禁房事固不須言也
又浴後可戒假寐何者浴後汗出毛孔已開若假寐
不被寢衣則必致邪襲故在大禁又俗說浴溫泉後
忌浴常湯若二臘浴者十四日三臘者二十一日其
數內必甚禁浴此亦不然也真俗論哉又浴中浴後
俱忌灸此甚不是若病宜灸者浴中益可灸以相助
援也浴後亦然何害之有

同書和華溫泉考之內

信州之別野

石湯 數座 在別野村

綿湯 小湯 在別野村

古河湯

印內

田澤內湯 山人湯

二座在田澤村

山家白骨淺間湯

小綿湯 在別野村

綿湯 小湯 在別野村

七滲

浦野



成相町村の
松のうらまへ
幾道の多魚川の
馬籠のゆかり
市丁の村々
蒼と蒼と

成相新田

善光寺

石塔

善光寺

町の
中央を
小川流る
右と左の町
とつらなる
七丁の村々
蒼と蒼と
蒼と蒼と

飯倉の橋

やつとる旅の姿をうけよふおまうけきようへをけき清水
 松りてれ志あ乃ささりら名を流し方い伝きききなりなり
 斐雄 亞元

○愛染川
 三輪山の麓に僅し小川をりて色赤川と名づく
 又此川七久利温泉の地より色赤川の名なり結家の寺と譽るなり
 春雨抄

信濃の川を過り初川のふたりにいさくせは川の津をほり
 知家

松本を去く道ををくおと養老坂を下り平瀬村の茶店へ憩ひ飯倉の橋を
 過り成相新田より穂高村へ至る粵に穂高神社ありゆけ九六十餘州小二百八十五
 座の格社なきは善光寺へ詣り人のむあむむ此宮小寺ありやハ猶其もを
 名ざら所くを奉て道は便小是を餘情小附録き

○穂高神社
 延喜式神名帳安曇郡大座穂高神社名神大
 同書臨時祭名神祭二百八十五座之内穂高神社一座

安曇郡穂高村小座と奥宮と穂高が岳小在り此所より行程九里餘本社
 奥宮ともい東面あり

祭神 穂高見命 南石姥女命 北瓊瓊杵尊
 天照大神の社右三社の北に並ぶ

穗高見命御陵 瑞垣の外本社 末社と廻廊の外北乃方小南面小並

八意思兼命 八幡宮 保食神 少彦名神 以上四柱相殿あり

牛頭天王 子安神 若宮社 五本杉 南に在 二本杉 大門口に在

天満宮 境外北の方天神原に在 側高島二筋の茅塚あり △神宮寺跡 境外南の方あり

例祭七月廿七日 社領むらゝ六十餘郷なりゝ今ハ僅小合ゝ十石余ヤ

社内 東西三丁 南北二丁 大祝 穗高見殿安雲重忠 下社家 九山新太夫 白沢大和 飯田鞍負 村上 白沢越後 主殿 宮園謙岐

巫女一人 △祭礼の節と氏子より船の形を作りく色々の美服を以て是を飾るるれ往古は色湖なりゝ時の餘波とひひ侍り

△御造宮定日記抜書

○穗高村 合穀石一斗六升 市幣紙四十一枚半 白米四斗一分六合 ○白金村 穀石一斗四分

紙二十枚半 白米一斗四合 針四十一半 ○草深 穀石二石八升 紙二十枚半 白米一斗四分 ○萱灰 天竺の比古貝杵と云

紙十把半 針十半 白米一斗四合 ○橋爪 穀石一石四分 紙十枚半 白米一斗四分 ○池田 穀石一石四分 針十半

耳塚 穀石三石二斗二分 紙三十二枚半 白米一斗四分 ○庄科 穀石八石三斗二分 針十把半 針十半 鍵太夫奉行

白米八斗三分二合 麻八十三把半 鍵太夫奉行 △南宮御寶殿。北等々力村處役

△御門屋 一字 二階。住吉。莊所役。飯田。熊倉村 穀石一石九升 紙十枚半 針十九文 九日祝奉行

○中曾禰 穀六斗五升 白米六斗五合 紙六枚半 ○中萱 穀五斗五升 白米五斗五升 紙五枚半

紙四枚半 麻五把 ○氷室 穀八斗五合 白米八斗五合 紙八枚半 ○大妻。内宮 穀一石九斗五升 針十九文 針十九文

高 穀一石九斗五升 白米一斗九升五合 紙十九枚半 ○唐笠木 穀一石 白米一斗九升五合 針十九文

麻十把 針十枚 錢十文 ○成合 穀六斗二分 白米六升二合 紙六枚 ○楡村 奉射祝奉行

○久木 穀二石五斗二分 白米一斗五升二合 紙十五枚半 ○二木 穀九斗五升 針十五把半

紙九枚半 麻九把半 ○及木。角懸。杏村 穀一石二斗七分 白米一斗一分七合 針九文半 錢九文半

錢十一文半 ○寺所 穀一石四分 白米一斗四分 紙十四枚半 ○真々部 五月祝奉行

穀六斗五升 白米六升五合 紙六枚半 ○長尾 穀一石一斗四分 白米一斗一分四合 針六把半 錢六文半 朔幣祝奉行

○平瀬 穀二石 白米二斗 紙二十枚 針二十枚 ○小宮 穀二石 白米二斗 紙二十枚 針二十枚 九日祝奉行

○若宮御寶殿 一字 ○犬飼寫所役 穀五石 白米五升 針十一文半 五月祝奉行

△御柱一本。大穴所役萩原。△御柱一本。重柳役御所役
鎌太夫奉行 △御柱一本。山本。降幡牧村所役 三月稅奉行 △御柱一本
 ○猪鹿牧。杭戸。多井村所役。△御鳥居内。田毛見。狐
 寫御所役。△御鳥居外。堀金所役 五月稅奉行 △御玉垣二方半
 ○細野。賀治屋毛見。板取御所役 鎌太夫奉行 △御玉垣一方半
 ○北大和田所役 鎌太夫長太夫二人奉行 △御荒垣一方半。菅沼郷所役
十五日稅奉行 △御荒垣二方半。細萱郷所役 三月稅奉行 △舞臺一宇
 ○前見保所役 板七石 白米七斗 紙七十枚半 手束麻七十把 針七十 錢七十文 十五日稅奉行 △廳屋二間
 半。古厩郷所役。△廳屋二間半。南等々力所役 鎌太夫奉行

天正七己卯二月二日

執筆
 仁科孫四郎
 平盛負花押
 總高忠兵衛
 知親花押
 大僧都法印憲應

○造宮卷八本奥書名前秘書

文明十五年ヨリ天正七年迄
 文言何モ同斷

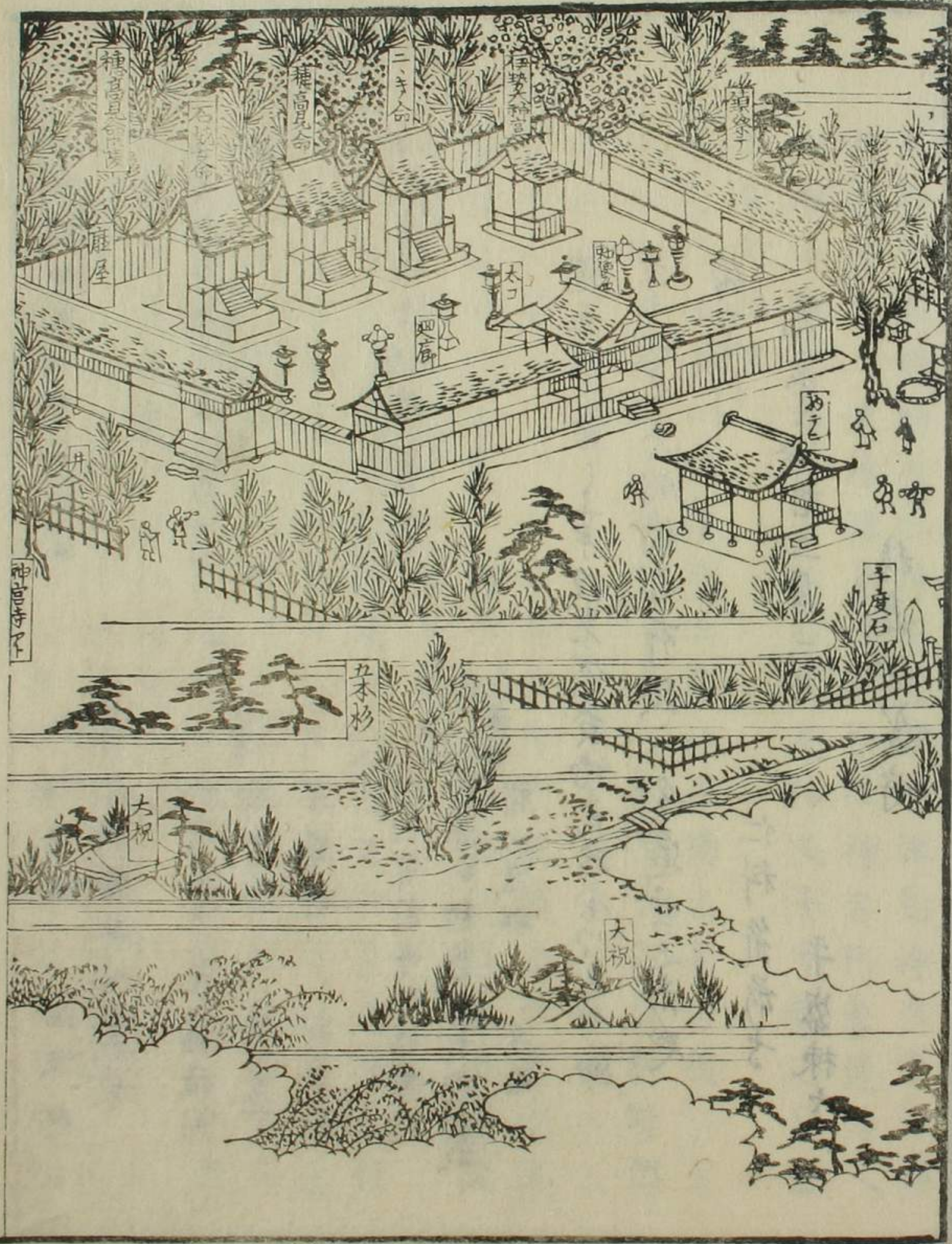
○文明十五年 癸酉二月三日
 盛知判
 知通判
 執筆 長光寺 覺朝

○長享三年 己酉二月一日
 治部少輔大伴盛知判

○明應十年 辛酉二月十一日
 清水石見守 盛好判
 箭口備後守 知光判
 執筆 中河原 知通判

○永正四年 丁卯二月四日
 盛知判
 則知判
 筆者 極樂坊慶海

○天文十八年 己酉二月一日
 三河守大伴清知判
 兵部少輔大伴知光判
 權少僧都神宮寺秀雅



穂高神社
 天神原 天神祠
 高宮一翁筆塚
 五本杉 二本杉
 神宮寺跡
 仁科街道

○永祿四年 辛酉二月十二日

仁科内膳 盛棟判
執筆 仁科櫻井住 義榮

○永祿十年 丁卯二月四日

執筆 仁科左京亮 盛棟判
神宮寺 憲亮

○元龜四年 癸酉二月三日

執筆 仁科筑前守 平盛棟判
宮奉行 穗高忠兵衛 知親
權大僧都 玄雄

穗高造營之事 依先例 於地式拾余町之勿論
至乃依吉太烟鴻為所投之令造營之考也
依此事件

元龜四年 癸酉二月三日

執筆 仁科筑前守
平盛棟判

神代卷

○次於水底 滌時所成神名 底津綿津見 神次 中津綿
津見 神次 上津綿津見 神此三柱 神者阿曇連等之
祖神也 故阿曇連者其綿津見神之子 宇都志 日金
折命之孫也

日本書紀

○安曇宿禰海神綿積豐玉彦神子穗高見命後
日本足彥國押人天皇 皇十六代 二年丙子六月科野阿
曇連祖來朝 關名

○應神天皇 皇十六代 三年冬十月辛未朔癸酉東蝦夷
悉朝貢十一月處々海人訕訕不從命 則遣阿曇連
大濱平其訕訕 因為海人之宰

○履中天皇 皇十六代 阿曇連濱子 一日阿曇
連里友 與仲皇子謀逆 被
捕捉 履中天皇元年夏四月辛巳朔丁酉召阿曇連
濱子 詔之曰汝與仲皇子共謀逆 將傾國家 罪當于
死 然垂大恩而免死 科墨即曰黥之 因此時人曰阿
曇目亦免從濱子海人等之罪

○同五年九月丙午日泅路至 阿曇連濱子以流刑泅路 故曰
泅路 九月丙午遇赦至京也
○用明天皇 皇三十四代 三十二年以勸勒為僧正 以鞍部

德積爲僧都以阿曇連爲法頭扱僧尼事
齊明天皇入皇三十八代三年西海使小華下阿曇連頗垂
小山下津臣偃倭自百濟還獻駱駝一驢二同五年
三月阿倍引田臣阿曇連比羅夫與肅慎戰而歸獻
虜三十九人百同五年六年帝使比羅夫討肅慎
國云是年又率船師一百八十艘討蝦夷比羅夫與
蝦夷戰而大勝蝦夷國悉自伏蝦夷者陸奥也同秋八月
遣將軍阿曇連比羅夫河邊百枝等救百濟
大化二年入皇三十七代三月癸亥朔甲子詔東國國司等
曰集侍羣卿大夫及臣連國造伴造并諸百姓等咸
可聽之已下治國之詔辭以文繁略之其詔辭之其阿曇連所犯者德史
有所患時於國造使送官物復取湯部湯部者今之之馬
其介膳部臣百依所犯者草代之物收置於家復取
國造之馬而換他馬來
天智天皇入皇三十九代八月遣前將軍大華下阿曇比羅
夫連小華下河邊百枝臣等救百濟
元年夏五月大將軍大綿中阿曇比羅夫連等率船

師一百七十艘送豐璋百濟國豐璋百濟王之
同九年秋九月辛未朔遣阿曇連頗垂於新羅
天武天皇入皇四十四代元年遣內小七位阿曇連稻敷於
築紫告天智天皇之喪郭務柢等郭務柢者異國之侍
同十二年十二月戊寅朔己卯阿曇連賜姓曰宿禰
右依舊事紀古事記日本書紀萬世統譜本朝通
記其他之舊記編稗畧云

略系

△伊邪那岐命。底津綿津見神。中津綿津見神。
。上津綿津見。宇津志日金折命。宇都志奈賀
命。海神綿積豐玉彥。穗高見命。阿曇連祖
關名。阿曇連大濱。阿曇連濱子。阿曇連里友
。阿曇連關名。阿曇連頗垂。阿曇連比羅夫將軍
。阿曇比羅夫連大將軍。阿曇連稻敷內小七位。阿曇宿禰
古事記傳
宇都志日金折命宇都志日金式不信濃國更級郡水鏡斗賣神
社和名抄以同郡水鏡鄉ありけり出る所名なり其故ハ彼國ハ安曇
郡ありて其郡ハ積高社名神大式不見く姓氏録以安曇宿禰ハ海神綿積



中
 早苗とらけ
 山乃長
 河川の
 加ねや日あり
 ぼろき
 秋阿



桂
 仕宿
 田
 武貫
 是乃月
 武貫

地名考

豊玉彦神兒後言見命の後也又安曇連綿積神之命の子穂高見命之後也
なりけり形り折れ彼國小佐之郡ありて此ふよりおや叔父く信佐國おは
氏の由縁どもれある其故未考得 予今是と見る 神祇の杜兼大祝の家なりと
連綿の古文也
海神の後海太師の姓も見くより大町のまに海を存残まうと上なると昔本海と
ついで十丁次と中細川海といひその次を海の口といひ二三の湖い大さとなり
この半といひ其もこと仁科といひ いさこのあなをけ 地草創の水を治めりけ
りう成りまき 神の勲功作くく一三湖ありし人のまを存ふありきまをりつて久保
路の傍をく往昔の通路ありし測えきなり

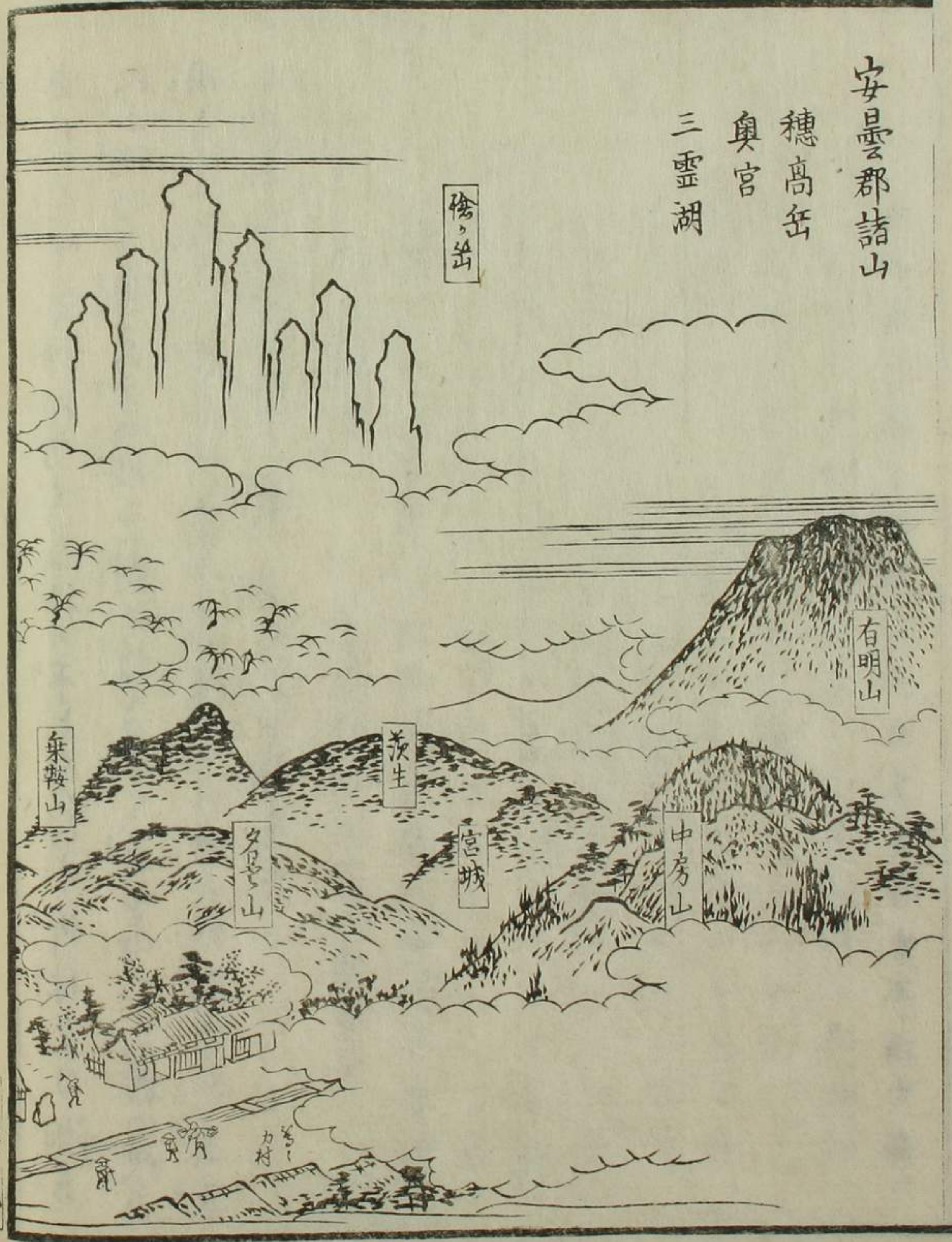
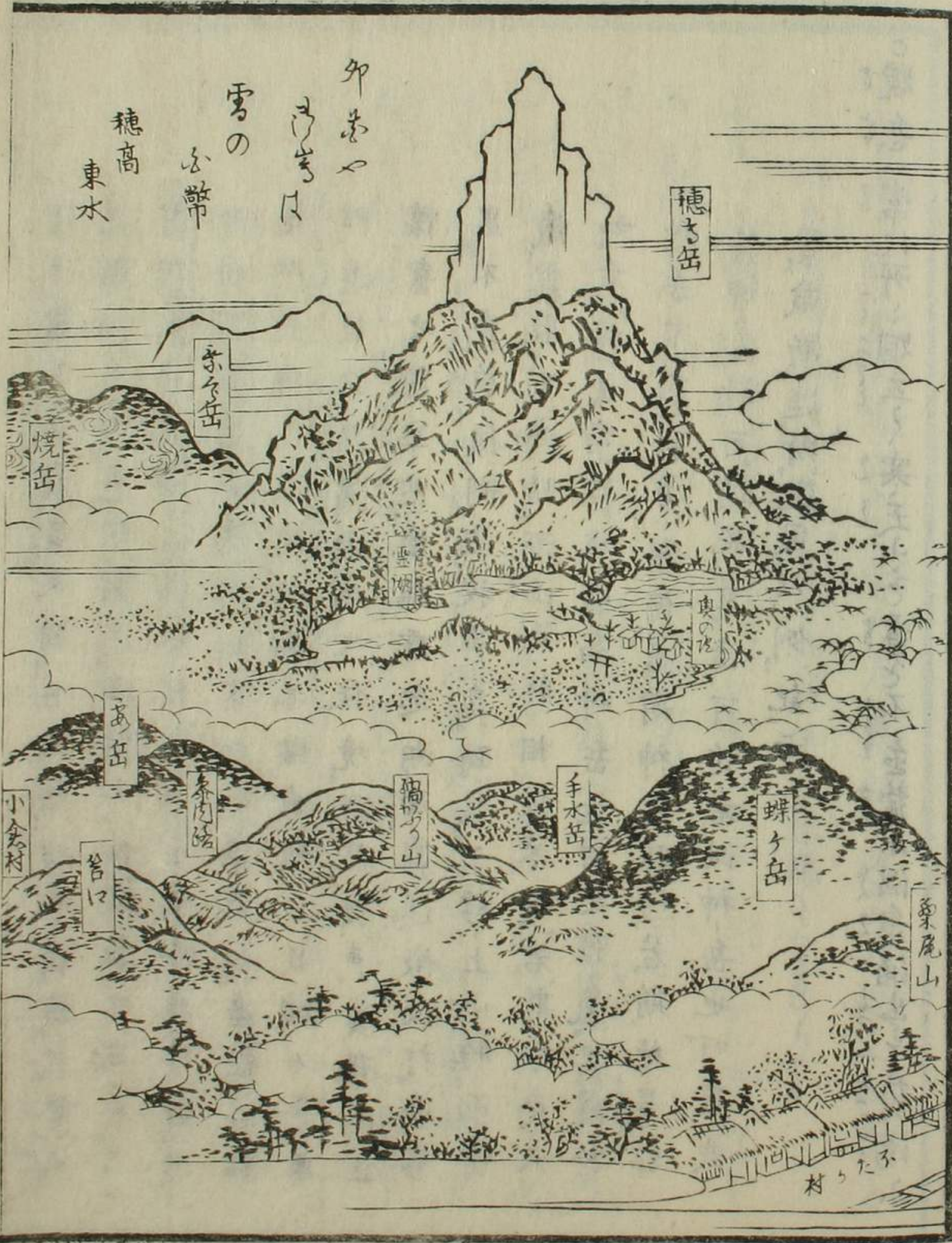
○穂高嶽 奥岳 ち安曇郡西の方飛彈國小坂合人作の靈岳雲を凌ぎく
幣帛のぶやく中空に秀く群山林苑を児立神号く爰小積嶽
に三乃湖水あり上池中池俱小大さ凡徑百四五十間横二百間をく奇
石岸を繞りて自然の林泉を成せり魚多くあり いとる 常小筏を浮
るく 弘人等こま 伏浪々 大なるものまき 尺四五寸斗下地と 大さ
池の半といひ 石南花 池の周小 繁茂して 花の色 殊と 麗しといひ 又 夫より

東北の廣野を神河内といひ神ヶ平といひく柳林なり湖を
以小細あり糸の木の皮を剥く枝をりく是を叩て大鞆の代小
用といひ近き穂高村の鑿師高鳥氏友達小誘引く彼其岳
小登り其地理を写し且一章の文を作しり

穂高嶽記

安曇穂高里人高鳥章貞

文政丁丑之夏詣於穂高嶽尋穂高神社之舊趾
夫穂高嶽者我信中當正西而極深接境于飛蓋
上古綿積神之子穂高見命雄據之地也其神孫
數世至今存此為岳麓右稱三十塚者号田代穂
高見命之後阿曇連墨世墳墓之地也岳之西北
自鎗岳麓岳之正南至燒岳麓其間六七十里岳
之正東諸岳之間夾梓河而地方七八里若十二
三里計平坦莫高低往昔生民居於此而為稼穡
云此岳乎巍々然秀天外雖盛夏積雪不消白雲



漠々常不見巔青天朗日偶然峻峯現極目望之
危削峙立似白幣巖々神跡可仰哉岳之足有三
霧湖大小不等上者湖面清冷水底砂石可數中
者奇石怪岩如鳥獸如累卵如墻壁如座榻石楠
花迴其岬下者湖邊樹木陰森雖白日朦々乎乘
桴遊觀湖中嘆山水之佳境慨然發聲賞揚不止
懷奮之際卒然巒端雲起湖面霧迷微雨打面昏
黑不弁前後惘然收声息躡偃于桴上小時而雲
藏霧散雨亦晴深山之躡相從來雖若斯乎更又
如有神灵嗚呼我穗高神岳乾坤之精氣其鐘於
此乎不然嶽与湖何若斯神靈邪何若斯絕景邪
其神灵敬可遠絕景清可近者此神岳也吁靈哉
景哉斯述所觀用以例記云

○燒岳ハ常に所々烟立ち寒天亦雪を不盡麓小温泉涌出と独湯小

して或る世の柔小糸を包て暫く差置飯と成るより近來山開けく
より温泉屋旅館屋を出来て飛彈道の憩場となせり

○栗尾山満願寺 真言宗高野山竜光院小属寺 牧村あり七十七石三斗余 此寺ハ山中ゆく其區より穗高村より

西へ鳥川を渉り牧村を越小岩岳の禁にあり寺傳ハ曰

人皇四十五代聖武帝ハ祈願ゆく草創し後本尊千手薩埵を境内より
八丁奥の長者ガ地より出現しより清大寺ハ分黄金ハ仙躰なり其後五十代
桓武帝ハ清宇延暦十四乙亥坂上田村將軍東夷退討の刻當國に馳下り
觀音ハ其夢を蒙り西山中房嶽に惡鬼を退治し萬民の苦患を度脱し
たり是より千手大士ハ靈感妙應方りとて大同二丁亥のあり田村利仁公
みつり清大寺ハ二寸の琥珀佛を雕刻し前立并安置して自他満願の
為に殿堂門橋軒をたかく僧坊院宇をほくね都く三十六宇の伽藍を建
立し國家鎮護乃靈場とす其規制宏麗しく信府ハ甲より折一ハ其
為形や前有死出山後有毘羅樹山西ハ峻く而檜杉圃北而覆天日東我

而甘泉流南而發地嶺 下畧

寺内に小鹿の松とつる名樹あり冷泉家より傳説を賜ふ

なすの松 山風と秋以て千代のさきもろ松とつるれ名ありわよき 為茶

○若澤寺 上俊田村水尻あり真言宗 寺領十石境内圍三里半程末寺四ヶ寺

本堂本尊 不動明王立像 弘法大師作 觀音堂本尊 行基作

内祇院 ためんあらしも清口水浄れ流るは法乃誓ひを

信濃國水沢山と天平勝宝年中行基菩薩の開基し大同年中田

村將軍中興れ建立たり金堂瑠璃殿の正觀音行基井の作千手觀

音と田村丸の兜の守佛なりといひ傳へ疫癘を除き又と夫婦愛敬

れ願との外萬徳の尊容され一誓に限り何事も行ふ應驗あり

といふなり中堂救世殿乃傍に松とつる大樹ありは杖男女の縁と

祈らば遂わるとぞ講堂に阿遮羅王の弘法大師の作仏なり境内小雄を

羽の遊あり此水は浴させば色黒き者純白と成て醜者容貌肅く成と云 下畧

宝徳二年六月一日

院主 若澤寺 鵜口 細野七右衛門

為 省聖 信兼 片方 立願成就処敬白

奉施入鵜口讚岐守

豐坂を以て朝日影を光明の輝をまきし梓川乃流とありかへり

又つる奇樹怪石あり所せ九折の道於八町のみなりといふ

と傳れて大夏高堂のつるを以て洋を以てせり一丁は科障あり

お本のありまゆわたりは乃をき場とてありりきむり

ては勝室はけりありは基善善後の宝基一なるとやある杖の

名今に朽そ旗鳥羽の遊絶とて五却不滅の石の宝塔

ふありり田村於軍は清き屋のつるを以てせり密教の流

布しなるり救世殿の莊嚴よりりれ古清の流は綱を以て

守敬傳却もろとせは鬼神と評とせり 湯作とて

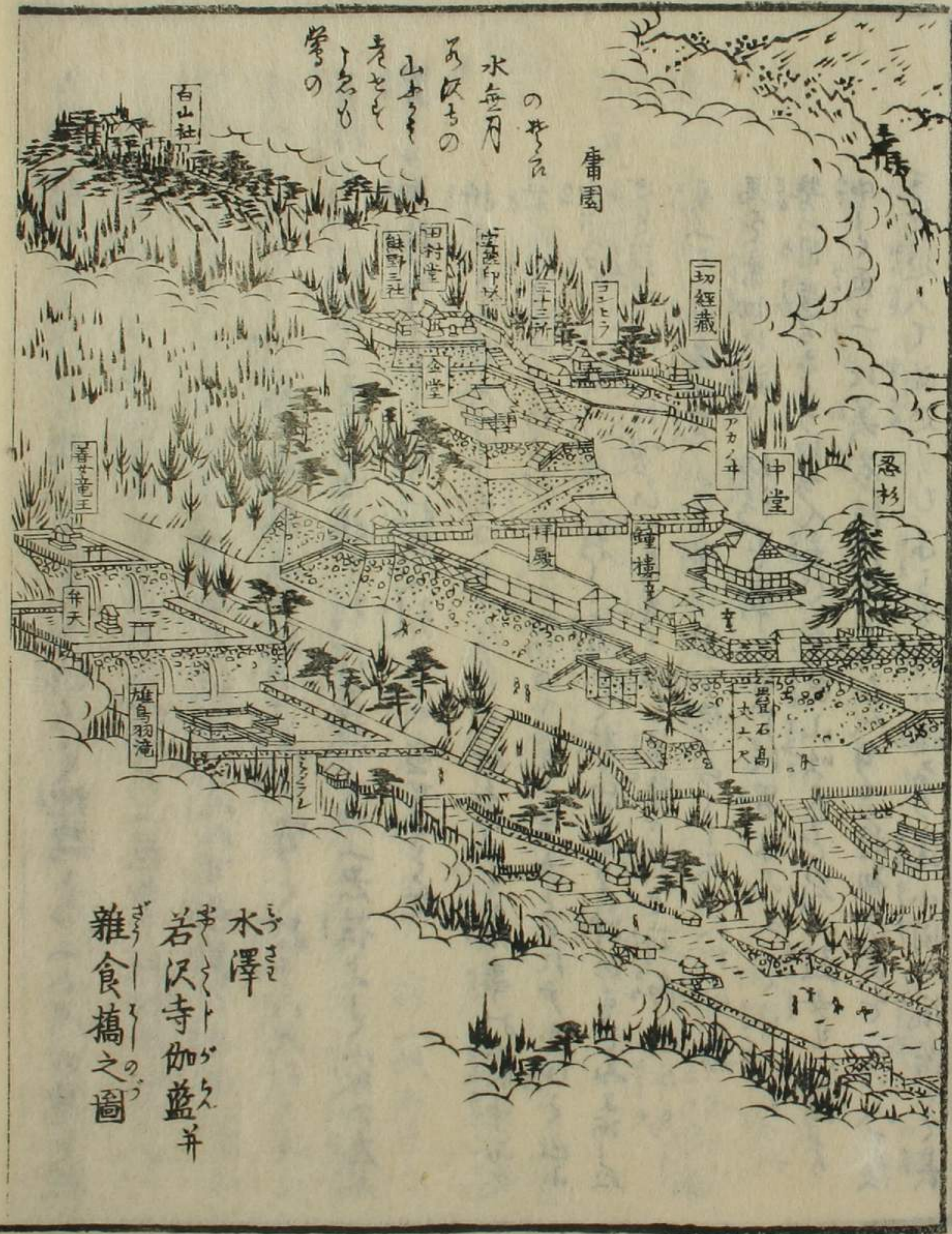
未せは命生もなるり人を強とせり

祝言乃千のみてはり人の機縁を結ふありの山

東郡 十返舎一九賦判

○雜食橋 水は若澤寺より八丁程成まの方 橋長廿間中六尺高十三間橋杭

傳り村を五十三年同い香積あり



水澤
 若沃寺伽藍并
 雜食橋之圖



春江補畫

梓川ついでふもこせむ橋なり是を流りく蛇橋といふ小川の橋と越
して鳩とら村むらたり酒造家ありて山間乃一邑なり此村の山乃中
腹に三光石あり長六尺をり中四尺徑高二尺六寸色黒く日月星は
うん赤色なり日月の太徑五寸徑半尺小石あり十八九あり此石
青梓川の河原より一を鳩とら村徳右衛門といふ者採よく家の庭に
置おけ勿な粹すなりとく今此所へ引上安置せり也

折まりも五月乃はけりつらなるを此もろも農事のうじに寂中さむかて
井い交まりつらり村毎むらごと山明の日と定め男女とも戸を閉く山小
堂どうに己おのが子こ毎ごとり深ふかん持もちく青あおの松まつなるを神かみのまきみよありぬ
ごと群ぐんと流ながりに鳴なひつを養やしなうやくあ葉はが枝えだを薊あざみ節ふし一ひと牛馬うまより
負おせり田毎とご小こ室むろよりす梯はし乃すなはち齒はと換かりぬ又また山人やまびとけけの婢こひめ婦め女むすめも
馬うまを糸いと切きに池いけく坂さか路ぢを車くるまもせり男子おとこ乃すなはち勇ゆう壯さうなる飛と
勢いきほハ目め雙ふたるたりにあんまの井い山やま吹ふきなどいへ烈はげ女むすめけ國くにより
中なく天あまに美み名な代しろ残のこるもむべなるかぬぬを田のちに入いて後
ろと遊あそ入いて端はなにはなひも小こ端はなり道みち山やま田のちの風俗ふうぞくを其その

撥はを一日二日に新あらたち勢いきほひつとを悉まくその山やまにはなは橋はし津つ小こ胎た
當あをかきまきとつらるる男女おとこむすめをも見み又またさうやく一

信濃しんのう活いや雪ゆきよりくへり田のちうに馬うま 中彦なかつひこ
於おく信濃しんのうハ他邦たっぽう小勝せうせつとく草木くさくの色いろ黒くろくくふれ性しやう後ご一ひととせ
穂高ほたかに帰かへり貝かい梅うめ村むらの乳ち川がわを流ながり狐きつね鳴なり高瀬たかせ川がわを越こへ十日市場じふにちいちば
淡田たんた見み籠かご澤さわ林はやし中等ちゆうじゆうとく他田た宿しゆくある是こゝと仁科にのき街まち道みちといふ

池田いけだ

六丁程相對して巷ちやうをなす其餘町裏まちうらに美在みざいを繁昌はんじやうの地ちなりまき
より大町おほまちへ三里此宿こゝの西にしふ近ちかく有明山ありのけやまとて高山たかやまあり屏風岳びんぷうだけ五六岳
の間まに又また信濃しんのう富士ふじと稱なづを鷄けい雷らい鳥とり能よくまま等ら多おほくといふ此こゝあり
を有明の里ありのけのさとといふ此山このやまの色いろ故ゆゑとくや淡間山たんまやまに劣せうらぬ高岳たかだけあり
深ふかくまきまき山の姿すがたもあつたつら西行上人さいぎやうじやうじんの教しやくとて人の口碑くちへいあり

信濃しんのうなる有明山ありのけやまを西にしにはなくをちきぬ道みちをゆくね
細野ほののといふ所ところも程近ほどちかく程古ほどふる詠えいあり
繞ま古今ここん
かゝり此こゝの夜よをさむくまをけりまねの山やまからかへり雪ゆき後鳥羽院ごうむういん



有明山
早瀬の舟
露水

有明山

屏風装



高瀬川の
渡り瀬より
有明山と

眺望
の図

春江補畫

言限川、越中境
より大九山内六十
里程の同敷十ヶ所
谷川が合ひて大
荒川なり予が
通る一時、
平水にて尙
五丈萬
舟行の中七八
里程の矢の如
く一本一本凡
女向よりやると
伎橋と渡せり
目もさめく
まろく小ぢん

新拾遺

夫木

屋よるる有明山の土宇あまてむへさ月の影うた

行家

夏より松の松々風きて月影まじり有明乃や浦

定家

け歌の名寄に秋風抄とあり

京師の景樹が歌あり池田乃関六郎雅名にが家お蔭む

佐治くぬちを山をまじりやうをまじりみなれ中に
後同文料それ名のまじりやうをまじりもこの安曇
の郡なる冥妻江う宿の西あまてらん言根うは
其の島まじりぬるくもつらまといふそれ見せ
うらみをおひたるや其奇

久々これ天の岩戸れ明しより雲井にのる有明の山

洛うちれ

文学よふふけけるん他火のかるゆあんとなり明乃山

草莽

雲井なる有明の月お輝くくはとくく名のはこちとされ

全

善光寺道名所圖會卷之一 終

